Bulletin 273

2018 冬号

COLONNADE

JIA建築家大会2017四国大会報告／海外視察レポート／ UIAソウル大会報告／沖縄支部 国際交流活動
第1回JIA神奈川建築フォーラム／埼玉地域会 空間デザインワークショップ／杉並土曜学校

FORUM

海外レポート／覗いてみました他人の流儀／バックヤードツアー
温故知新／日本版CABEを考える／委員会活動報告／地域会だより／東京三会 待機児童問題解消WG

公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部

ヒガノ㈱　日向野吉一（ひがのよしかず）社長

作り手も使い手も誇らしく思える製品が建築を美しく豊かにする

前号から始まったこの「パートナーズアイ」では、協力会員の皆様を取材し、その会社や商品の魅力を伝えていきます。今回ご紹介するのは埼玉県草加市にあるヒガノ株式会社。精密板金や機械加工技術の実績が高く、これまで産業機械等を製造してきました。現在は、大型門扉・庇や車止めなど、建築家に向けてつくられたオリジナルブランド「PRO-FIT」を展開中です。日向野吉一社長にこのブランドに込めた思いや、ものづくりに対する姿勢について、お話しいただきました。

建築家とつくる建築家のための商品

これまで、町工場として自動車メーカーのパーツ製造、水処理機械などをつくってきました。約30年前、38歳で次はどのような商品を開発しようか悩んだ時、建築の影響力の大きさに気がつきました。よい建築はそこに来る人の風情までも変えることができるのです。ぜひそのような空間で生きる商品をつくりたいと思いました。

建築には必ずそれを設計した人が存在します。ですから、設計者である建築家に向けたオリジナルのブランド「PRO-FIT」をつくることにしました。PROFESSIONAL FIT by HIGANO――建築家のつくる建物にフィットするような製品を目指しました。

「PRO-FIT」のブランドコンセプトは、「建築家向けのものづくり」、「品質と質感」、「Elegance is Forever」の3つです。商品は必ず建築家に意見を聞きながらつくります。そして、品の良いものを建物に置いておくと、品の良い人が入っていき、品の良い使われ方をする。また、海外を旅行するとわかりますが、“きれいなものは一生”ということを私自身が今までの体験からよく感じています。ですから、デザインも、さらに機能性にも優れた商品づくりをしています。そして、壊れたら当社が修理にうかがうという姿勢を貫いています。

新製品ノンレールマルチ引戸手動タイプ（特許登録製品）

本社工場

設計者の方たちに商品を知っていただくまでは苦労しました。朝から晩までカタログを持って動き回り、JIAなど建築家の方が集まる場所には積極的に顔を出しました。知ってもらわなくては信頼を得ることはできません。おかげさまで現在は大型門扉や庇、車止め、業務用傘立てなど多数の商品を展開し、注文もいただくようになりました。

気持ちのこもったものづくりをしていきたい

今努力していることは、つくり手をしっかり育てることです。当社は量産ではなく受注生産なので製作に時間がかかりますが、自信をもってつくっています。

最近は魂がこもっていない製品が多いと感じます。日本は経済効率ばかりを意識していますが、それで豊かな空間はつくられるのでしょうか。ものは豊かにありますが、日本人は豊かな生き方ができているでしょうか。手に入れたことを誇らしく思ってもらえるようなものづくりを目指して、私たちは「PRO-FIT」の開発に努めています。

安く人を使おうという社会ではだめです。そうではない姿勢をつくっていかなくてはなりません。その手本になるような会社にしたいと思っています。自分の仕事を誇らしく思い、自社の製品が使われていることを嬉しく思ってほしい。その感覚を多くの人がもてる社会になることを願っています。

HIGANO
ヒガノ株式会社　http://www.higano.co.jp

大型門扉、庇、車止め、傘立て、消火器ボックス、傘のしずく落とし、ウォールイン飾り棚など。

本　　社　埼玉県草加市青柳3-24-7
TEL：048-931-3321　FAX：048-931-7332
東京営業所　東京都中央区日本橋蛎殻町1-1-9 ヒガノ日本橋ビル
TEL：03-5623-3889　FAX：03-3662-7778

CONTENTS

COLONNADE

4 **JIA建築家大会2017四国 阿波おどりの国 とくしま大会**「建築家と土着」 四国支部／内野設計 内野輝明
JIA建築家大会2018東京に向けて JIA関東甲信越支部 支部長／山下設計 藤沼 傑
6 **海外視察レポート** チベット・客家・長城の超建築空間視察 鈴木アトリエ 鈴木信弘
7 **UIAソウル大会参加報告** 相坂研介設計アトリエ 相坂研介
8 **沖縄支部 国際交流委員会活動** 東京よりアジアの方が「近い」沖縄の地政学 沖縄支部／アアキ前田 前田 慎
10 **第1回JIA神奈川建築フォーラム** 都市木造が暮らしとまちを変える GEN INOUE 井上 玄
12 **埼玉地域会 空間デザインワークショップ** 「紙の森をつくろう」 アライ設計 村田行庸
13 **杉並土曜学校** 善福寺池周辺の旧井荻村まち歩き Studio PRANA 林 美樹

FORUM

14 **海外レポート** 32年後の同じ日に地震・メキシコ市 関東学院大学名誉教授 椙木紀男
16 **覗いてみました他人の流儀** なかだえり氏に聞く その場所で体感したことをイラストにして伝える Bulletin編集WG
18 **バックヤードツアー** 東京都美術館 Bulletin編集WG
20 **温故知新** 抱負を語る 夢をかたちに アズ設計 竹下啓子
抱負を語る 「新人」までの道のり 空間構想一級建築士事務所／東京大学 川添善行
21 **日本版CABEを考える** 「きた住まいるヴィレッジ」北海道支部による、行政との協働による地域住宅づくりの取り組み
北海道支部 副支部長／照井康穂建築設計事務所 照井康穂
北海道支部／山本亜耕建築設計事務所 山本亜耕
北海道支部／エスエーデザインオフィス一級建築士事務所 小倉寛征
22 **委員会活動報告** アーバントリップ実行委員会 第83回JIAアーバントリップ スタジオクチン一級建築士事務所 佐藤文人
23 **委員会活動報告** アーバントリップ実行委員会 第84回JIAアーバントリップ 富岡達郎建築設計事務所 富岡達郎
24 **委員会活動報告** 支部建築家資格制度実務委員会 寺山建築工房 寺山 実
24 **委員会活動報告** 交流委員会Aグループ 大洋基礎 杉本法司
25 **委員会活動報告** 交流委員会Fグループ 新晃工業 川辺隆士
25 **地域会だより** 城南地域会 松本建築設計事務所 松本 裕
26 **地域会だより** 城北地域会 秋山設計事務所 秋山信行
26 **地域会だより** 港地域会 村上晶子アトリエ＆パートナーズ 村上晶子
27 **地域会だより** 目黒地域会 タオアーキテクツ 木村丈夫
27 **地域会だより** 新宿地域会 小倉設計 小倉 浩
28 **東京三会建築会議** 待機児童問題解消WGの活動報告 ウエガイト建築設計事務所 上垣内伸一

BACKYARD

30 広報からのお知らせ 新ホームページいよいよ公開！
30 広報からのお知らせ JIA建築家大会2018東京 告知
31 コラム 仏像の横「百済観音」 鈴木弘樹
31 編集後記

3 **パートナーズアイ** ヒガノ株式会社 作り手も使い手も誇らしく思える製品が建築を美しく豊かにする

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹ Fax：03-3408-8294
http://www.jia-kanto.org/members/

JIA建築家大会2017四国　阿波おどりの国 とくしま大会

建築家と土着

建築家大会2017四国
実行委員長
内野輝明

開催期間：2017年9月28日（木）、29日（金）、30日（土）
主な会場：あわぎんホール（徳島市）

9月28日～30日に開催しました「JIA建築家大会2017四国阿波おどりの国とくしま大会」は、盛況のうちに終了しました。会員、協力会員の皆様をはじめ、来賓の皆様、海外からのお客様、そして本部・支部事務局の皆様、その他ご協力いただいたたくさんの方々のおかげです。さまざまなイベントのパノラマ写真をそろえました。あの盛況ぶりが伝わるでしょうか……。見ていると、準備の大変さはもうすっかり忘れてしまって、もう一回やりたくなってきます（笑）。徳島県人が言うのも変ですが、「阿波おどり」はやはりすばらしいですね！来年の東京大会には、ご恩返しに四国支部大挙してまいります!!

ウエルカムパーティー
2年前の四国支部大会@徳島、もう少し下流の埠頭でのパーティーが忘れられず、雨を心配しながらも屋外開催を画策。降っていた雨も夕方にやんで。地域会会員の作品でもある水際公園での宴、ごっつもんりゃがりましたね～！

レセプションパーティー
春の各支部へのPR行脚の際、いろんなとこで「今日は阿波踊りないの？」て（笑）。本番では、有名連のひとつである菊水連に来てもらいました！ 手の動き、足さばきをみんなで練習して。ほらみんな連長に合わせてちゃんとやってます（笑）。

選抜踊り子オンステージ！
連長から声をかけられた天水たち（阿波弁で、少しめでたくて、調子がよくて、ひとつのことに熱中しやすい人→これって「建築家」でないで？）が、壇上にあがってマスターしたそれぞれの踊りを披露してくれました!!
みんな楽しそうです！

実行委員会から…
中締めの前に、四国支部大会実行委員会全員で壇上に上がらせていただいて、お礼を言いました。3つのシンポジウム、メインシンポジウム、大会式典も無事終わって、かなりの達成感のなか……。全国からお集まり下さってありがとうございました！

受付周辺の様子

毎朝ここでスタッフ全員集合！ ちょっとミーティングして大会に臨みました。初日の身震い、2日目は大会式典を控えてドキドキ、3日目はもうけっこうぐったりしながら……。実行委員にとってはベースキャンプ的なお互いを励まし合う場所でした。

バンド大会

大阪大会でのウエルカムパーティーの続き。東北支部バンド、本部＋関東甲信越支部バンド、四国支部バンドのほか、北海道支部やほかの支部からの飛び入りもあり（みんなちゃんと楽器は持参していましたね（笑））。建築家はミュージシャン率高いなあ。Nui氏のロックンローラー魂にも揺さぶられましたねぇ。
来年はJIA東京大会、そしてアルカジア大会でもぜひ!!

JIA建築家大会2018東京に向けて

JIA関東甲信越支部 支部長　藤沼 傑

徳島で大会があったので、初めて徳島に行きました。すだちが旬の季節で、美味しかったですね。最も印象的だったのは、土曜日のシンポジウム「徳島に「来ている」建築家と、徳島に「いる」建築家」で、私より若い方の地方での活躍です。同じ日本人でも、地方の街に入ることがいかに大変か、濃密な人間関係とコミュニティーの重さを実感しました。これほど、「来ている」ことが重いならば、今世界で問題となっている難民はどうしたら良いのか、シンポジウム後に聞いていました。

さて、2018年はアルカジア大会と重ねた全国大会ですが、土着からいきなり世界や東京メガロポリスを扱います。2016年にアルカジア大会開催が決まりましたが、アルカジア大会と全国大会とは完全に切り離すという意見が多く、実行委員会も別々に活動してきました。この流れは非常に残念なことでした。合同で開催するか、またはアルカジア大会に集中して、全国大会は開催しないのがベストであったと今でも感じています。

そもそも、全国大会は何のために開催するのか。実行委員会ではこの議論から始めました。大会があれば、全国各地を訪問できます。会員の親睦は非常に重要ですが、SNS世代の若い人は大会での親睦を重視していません。

議論の結果、2018年東京の最大の目的は、次世代会員の勧誘であるという結論が出ました。次世代は間違いなくアジアとつながっていますので、分離された2つの大会で次世代をどのようにアジアにつなげていくかを考えています。

その矢先に、先日のJIA理事会で大会の方針が180度変更となりました。できる限り重ねて、より多くのJIA会員がアルカジア大会に参加できるようにするということになりました。アルカジア大会は木曜日の朝に開会式があり、木曜日午前から基調講演1が始まり、全国大会と重なりながら金曜日の午後まで魅力的な基調講演を計画しています。そして土曜日は各JIA全国会議をまとめて開催することになりました。

メガロポリス、アジア、そして世界につながる3日間を企画していますので、次世代の会員をぜひ誘ってください。

チベット・客家・長城の超建築空間視察

―その空間力を探る―

鈴木信弘

日本建築学会関東支部・神奈川支所では、「空間の魅力」をテーマにした連続講演会を主催しており、その延長として2年に1度、視察旅行を行っています。現在までに、2009年韓国（ソウル・安東の伝統建築と近・現代建築）、2011年ネパール（伝統的建築・都市）、2013年インド（伝統建築とチャンディガール）、2015年フランス・スイス（コルの作品＋話題の現代建築）を実施しており、今回は5回目、2017年9月にチベット・中国を訪ねました。

北京で紫禁城、天壇、銀河SOHO、万里の長城、竹屋などを見て、ラサに移動。ノルブリンカ、タシルンポ寺、ポタラ宮、セラ寺、トゥルナン寺などチベット建築を堪能し、重慶経由で厦門から福建省に向かい、土楼群を満喫して帰るという駆け足の8日間でした。

天界の「ポタラ宮」

海抜3,700m、地面が隆起したかのような圧倒的な存在感、建築面積13万㎡、長さ400m、高さ119mの13階建、大小2,000室ともいわれるポタラ宮。坂と階段をひたすら上がって天界にたどり着いたかと思えば、内部に入ると暗闇の中は夥しい彫塑、仏像、金箔・宝石、霊塔が繰り返され、視覚と臭覚の圧倒的な情報量が幻覚をもたらします。閉鎖的で密閉性が高く、隠蔽された洞窟のような空間でしたが、時々現れる中庭の光に癒され、手を伸ばすと空の青、雲に手が届きそうなくらいでした。

客家の住まい「土楼」

土楼は、山岳地の猛獣や山賊の襲撃を警戒する必要から生まれた居住形式。外周直径40～70m、大きな土楼は一族57家族、300余人が生活とのこと。門から奥に祖廟を持つ軸があり中心部が共同空間。家族の占有部分は中庭に向いて垂直方向に配置され、1階は家族の居間、2階は倉庫や作業空間、3、4層は寝室。いったん入れば円中の空間は開放的で明快な構成ですが、家長制度＝建築形式に生活の重さを感じます。さまざまな形のなかでも田螺坑の楕円の土楼が気に入りました。完全な円でないことが、こんなにも緩く、空間を広げるのだと実感したからです。

ポタラ宮全景

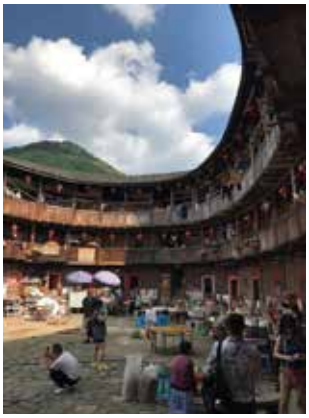
銀河SOHO（設計：ザハ）

ノルブリンカのアプローチ

チベット建築の特徴

そして２年後へ

訪ねた「超」建築空間は、尋常でない、思わず「ウァッ！」と声が出るような体験ばかり。具象的で濃密なチベット、紫禁城や客家土楼の抽象的な明快合理、私はどちらの建築空間にも強く惹かれました。団長の福井通は「2つの空間系は「図と地」の関係にある」と解説、2年後の旅でまた確認していこう！と旅を締めくくりました。



客家の住まい

田螺杭土楼群

UIA（世界建築家連合）ソウル大会参加報告

関東甲信越支部
常任幹事
相坂研介

9月初旬に丸一週間、3つの目的を兼ねて韓国に滞在してきました。ひとつはUIAソウル大会関連イベント、「サッカー世界建築家杯（WA-CUP）」出場のため、ふたつめは同じくUIA関連アワードの授賞式への参加とプレゼンテーションのため、3つめは両者の間を遅めの夏季休暇とし、ソウル建築を視察するためです。

2日に行われた「WA-CUP」とは、スポーツを通じた建築家の国際交流を目的に、日韓ワールドカップを機に2002年に両国間で始まって以降、2006年には中国が加わり「AA-CUP（アジア建築家杯）」に、さらに2011年UIA東京大会からはアジア諸国のチームも参戦し「WA-CUP（世界建築家杯）」へと拡がり、開催地を毎回変えつつ15年受け継がれてきたJIA公式プログラムです。私も過去2回出場経験がありましたが、日本の公式参加が最後かもしれないと聞き、常任幹事として再確認すべく、3度目の代表参加を決めました。

今年は韓国、中国、マレーシア、タイ、ラオス、日本の6か国10チームが参加。スウォンワールドカップスタジアムのピッチ2面を使い、5チームずつの予選リーグから、決勝で1位同士、2位同士が争い、総合成績を決めました。日本代表は得失点差でリーグ2位通過だったため、決勝でも勝って4勝1分0敗ながら3位。優勝は4チーム参加の韓国でした。

ゲーム後の表彰式で、各国選手と互いを称え連絡先を交換したり、自国チーム内にも所属を越えた人脈ができたりと、スポーツを通じた国内外の交流はJIA会員にとって貴重な機会であり、またそうした場を提供できる環境がJIAにとっても入会検討者への魅力のひとつとできるので、ぜひ継続してもらいたいものです。

予選で引き分けた韓国Aチーム（優勝）と日本代表チーム（3位）

途中は休暇とし、宮城・旧市街を含む中区・鍾路区から、高級住宅街の龍山区、経済中心地の江南区まで、全域の近現代建築を駆け足で網羅的に見学しました。特に韓国現代建築には、日本における発展期の勢いと現在の落ち着きの良い均衡が全体に感じ取れました。

6日はUIA会場へ。私が受賞したのは、「UIA Friendly and Inclusive Spaces Awards」の特別賞で、2015年に竣工した「あまねの杜保育園」が対象。受賞者プレゼンテーションでは、タイトル通り、子どもの過ごす時間、空間、環境に対する僕らの配慮や包括的な工夫を紹介し、ご質問にお答えしました。表彰式ではゴールドメダルを受賞された伊東豊雄さんを大トリにCO-EXの大ホールで壮大に行われ、続くコンサートも楽しんで、翌7日に帰国しました。

CO-EX（ソウルのコンベンションセンター）での表彰式

ソウルではこの間CO-EXだけでなく市立美術館やザハ・ハディッドが設計したDDPなどでもそれぞれ質の高い建築展が同時開催されており、PRも徹底していました。また大会に合わせ数か国語版の建築ガイド本をソウル市自身が発行するなど建築の観光利用も積極的で、建築の力を街全体が信じ、建築で盛り上げようとする熱量に溢れていました。成熟とは冷めることではない。五輪を控えた日本人建築家として、「建築の力をまず建築家が信じる大切さ」を教わった一週間でした。

ソウル市立美術館（左）と東大門デザインプラザ（右）での建築展

沖縄支部 国際交流委員会活動

東京よりアジアの方が「近い」沖縄の地政学

沖縄支部
前田　慎

私たち沖縄支部では国際交流事業を継続して行っていて、今年で6年目を迎えます。

『Bulletin』2013年1月号の海外レポートの中で、芦原会長（当時）が「国際社会との関係は友好から国際協調活動・事業協力へと変化しつつある」そして「若い会員も含めた国際化の推進を目指す」ということを書かれていました。まさに時代は芦原会長のコメントの環境にあると言え、私たち沖縄支部では地理的条件を最大限に活かし、アジアへ目を向け積極的にアプローチして行く方針を立て、2012年度に国際交流委員会を設立しました。その根幹を成す事業として、第1回国際交流事業を委員会設立元年に実施し、参加者15名でタイ王国へ行きました。

第1回国際交流（2012年）　訪問先：バンコク

JIA正会員である琉球大学小倉教授の研究室が数年にわたり研究している、スラム住宅改善事業の現地視察や、タイ王立大学のキングモンクット工科大学（KMITL）との交流を行い、タイ王立建築家協会（ASA）所属の若手建築家の作品と伝統的な民家群を視察し、沖縄と同じ蒸暑地域の建築のあり方等、意見交換をしました。タイとの国際交流はこれを機に、琉球大学へ短期留学で来沖したKMITL学生の実務研修を沖縄支部会員事務所で受け入れて実施する縁となり、今現在も継続して行っています。

琉球大学小倉研が研究調査している、スラム住宅改善事業の現地視察。

第2回国際交流（2013年）　訪問先：タイ・チェンマイ

参加者は18名。オブザーバーとして室伏次郎先生が参加しました。KMITLの先生たちと現地で再会し、各視察先の案内や解説をしていただきました。1970年代に室伏先生がチェンマイで設計された教育施設訪問も企画し、不明であった所在地などをKMITLが事前に調べ、当該学校への見学アポイントも取り付けてくださり、無事訪問が実現しました。加えて、東南アジア各国の民族集落の住居形態などを研究されているチェンマイ大学の先生を紹介していただき、特別レクチャーを開いてくれたりもしました。建築家交流では、ASAランナー支部（北部支部）との意見交換等交流会を実施しました。歓迎の晩餐会では、所属建築家の方々と打ち解けた雰囲気の中、友情を築き深めました。現在もSNS等さまざまな手段で各人が継続して交流しています。

チェンマイ大学で、東南アジア各地の民族住宅様式について、特別レクチャー受講中。

第3回国際交流（2014年）　訪問先：シンガポール

参加者はオブザーバーに古市徹雄先生を迎え21名。シンガポール建築家協会会長、副会長と意見交換を行い懇親を深め、現在手掛けている公営集合住宅の話など、シンガポールの建築事情を伺いました。地元建築家とケリー・ヒル事務所の訪問も叶い、ご本人による作品解説と事務所見学をさせていただきました。建築の視察も行い、特に槇先生より紹介状をいただきご自身設計の理工系専門学校を見学できました。デザインコンセプトや設計プロセスを説明していただいてからのキャンパス視察は内容の濃いもので、この国における人材育成の本気度とレベルの高さを垣間見ることができました。沖縄県シンガポール事務所駐在員の方によるマリーナベイサンズMICE施設案内解説は、大型MICE施設計画を控えた我々沖縄の建築家にとって興味深い視察となりました。

ケリー・ヒル事務所を訪問。

第4回国際交流（2015年）　訪問先：香港、澳門

参加者は13名。年度末2月の実施となりましたが、香港の春節と重なり香港建築家協会（HKIA）主催のSpring receptionに招待していただき、その後、会長および理事、会員の方々

との会食に場を移して意見交換を行いました。沖縄支部から沖縄の風土や古民家など伝統文化、戦後沖縄の近代建築などをプレゼンし、沖縄を紹介しました。この事業では、日本側で協力していただく方、現地側で大変お世話になる方が、それぞれの回にいます。第1回では琉球大学の小倉先生、第2回ではKMITLのDAO先生、第3回では古市先生、そしてこの第4回では本部国際交流委員会委員長であった岩村先生に紹介していただいたHKIA理事でもある珠海学院のCHU先生に大変お世話になり、盛りだくさんの内容となりました。地元設計事務所の訪問、著名建築の視察、地区計画地域の視察、大学との交流等々。回を重ねるごとに内容が濃くなると評判の国際交流事業を象徴する回となりました

香港建築家協会の皆さんと

第5回国際交流（2016年）　訪問先：カンボジア王国

訪問先はカンボジア王国・プノンペンおよびシムリアップ。参加者は12名。今までの訪問先は国際化が確立された都市で、多くの建築家が国外プロジェクトに関わっている国際化先進都市でした。彼らの設計スタンスや考え方を見聞きして、この先の指針を模索してきましたが、今回は視点を変えて未開の地の視察でした。しかし、結果今回程海外進出のヒントに溢れた回はないのではと感ずる内容となり、日本企業とのコラボレーションやNGOなどの立ち上げ、それに伴う資金調達等々、目から鱗の成功実例を見聞きすることができ、大きな収穫でした。近い将来、当支部会員がこの国で仕事を行う可能性が高いのではとさえ思えました。これからの国造りに対する情熱が非常に高く、知的醸成に意識が高いこと等がその理由と思え、支部としても大いに注目して行きたい国となりました。アンコールワット等名跡を訪れるとともに、日本人が運営するバイヨン地区の中学校を訪問。プノンペンでは、日本人建築家が設計し日本企業が管理運営するマンスリーマンションを視察、プノンペン工科大学と芸術大学を訪問し授業を見学したり、こちらから沖縄の建築文化を紹介する等交流を行い、カンボジア建築家協会（CSA）所属の建築家ともお会いでき意見交換しました。もちろんカンボジア建築家のドン、ヴァン・モリヴァンを始めカンボジア近代建築の視察も忘れず行い、郷土の文化を近代建築で表現した、ダイナミックな空間構成に魅入りました。

プノンペン芸術大学の製図授業に参加。

第6回国際交流（2017年）　訪問先：韓国・ソウル

訪問先は韓国・ソウル。参加者は15名。この年、韓国でUIA大会が開催されました。この時期、県内全体が平日でも祝日と化す程の日である「旧盆」が重なり、北朝鮮関連の不安要素もあり、興味深い地ではありますが、この年のソウル訪問を見合わせる空気がありました。しかし、支部長の「風評多き東日本大震災の年のUIA東京大会であるにもかかわらず、韓国から多くの建築家が訪日し、大会を盛り上げてくれた恩を忘れない」との思いに、ソウルへの国際交流事業を実施しました。本部から情報を提供していただき地元建築家とコンタクトを取り、建築家自ら案内してくださった作品の見学や若手建築家の事務所訪問もさせていただきました。建築家ご本人による作品解説を拝聴する有意義な内容、日韓建築事情の情報意見交換の場ともなりました。UIAソウル大会ではウエルカムパーティー、開会式出席をはじめ、各展示ブースを観覧。世界各国の建築家が集まるビッグイベントへの参加を堪能しただけではなく、来年の国際交流事業訪問候補地の建築家とのコネクションもしっかり取れましたし、沖縄県建築士会と交流深い韓国済州建築士会会長との再会も会場でありました。JIA本部の方々や他支部の方々とも現地で交流できました。金壽根設計の現在美術館になっている旧空間社屋も休館日にも関わらず案内・解説していただき、まさに充実した回となりました。

チェ・ムンキュウ先生設計の商業施設視察。チェ先生による案内と解説。

■これからの国際交流（2018年～）

皆さんの会社から台湾へ無理なく日帰りできますか？私たち沖縄からだと、打合せ込みでゆったり日帰りできます。台北エリアが現場なら、日帰り現場監理だって可能。コミコミ往復2万円前後の空路定期便。九州に行くのと時間もコストも同じ!?くらいです。私たち沖縄支部は、内地（日本）よりアジアを見ています。アジアの建築市場へ近い将来、いや、年明け来年にも支部会員が複数進出!?　インフラは整っているので、本気でやるなら「今でしょ」の精神で、そんなビジョンを持ちながら、JIA沖縄支部はかなり国際化していると思われるような活動をしていきたいと思っています。

第1回JIA神奈川建築フォーラム

テーマ

都市木造が暮らしとまちを変える

神奈川建築フォーラム
実行委員長
井上　玄

開催日時：2017年10月27日(金)、28日(土)、29日(日)
会　　場：みなとみらい線 馬車道駅コンコース

神奈川地域会（以下、JIA神奈川）は、飯田善彦代表が掲げる「Think Local Act Global」をスローガンに、「かながわ建築祭」、「街歩き」、「子ども空間ワークショップ」を中心に、広く市民へ建築文化を啓蒙すべく活動しています。
今回、産・官・学・市民の境界を越え、建築のトピックスを共有するイベントとして「JIA神奈川建築フォーラム」を立ち上げました。第1回目のテーマは「都市木造が暮らしとまちを変える」。この主旨から、会場を公共のオープンスペースである、みなとみらい線・馬車道駅コンコースとし、2017年10月27日から29日までの3日間、NPO法人 team Timberize と横浜市建築局にも共催していただき、展覧会と連続シンポジウムを開催しました。　（JIA神奈川建築フォーラム 実行委員長　井上 玄）

■フォーラムのテーマ設定と目的

今回のテーマ「都市木造が暮らしとまちを変える」は、私たちが生活する都市にある多くの建築、集合住宅、オフィス、商業施設をはじめ、学校、図書館、美術館などが木材でつくられる未来のために、それを設計する建築家、公共建築の発注者である行政、その建築を使う市民が都市木造の魅力とまちの風景を共有し、実現に向けた足がかりにしたいと考えました。

■「都市木造」の現状

これまでの都市建築は、公共性が高い建築、不特定多数の人々が集まる建築であればあるほど、耐火性能、耐震性能をより高度に備えるべく整備されてきました。そのため構造体にはコンクリートや鉄骨が当たり前のように採用され、日本が誇る木材を主構造とする作り方は不適正で、住宅や特別な条件下での建築に制限されてきました。しかし一方で、日本の主産業のひとつである林業の衰退に歯止めをかける意味でも、さまざまなエンジニアリングウッドや、ジョイント金物の開発をはじめ、多くの涙ぐましい努力でその不利な条件を突破し、もう一度木材を復権させようとする試みも重ねられてきました。

その甲斐もあり、2000年の建築基準法の改正で、都市において大規模建築を木造でつくる可能性が大きく開かれることになりました。

一方、木材を新しい素材と捉え、その可能性を提言、実践している先駆者に、建築家集団 team Timberize がいます。都市木造という言葉も彼らの活動が広まるにつれ社会に浸透し始めました。

今回のイベントは、彼らを共催者に迎え、これまでのさまざまな試み、実際に実現している成果などを通して、都市木造の今後の可能性を模索しました。また、横浜市の建築局にも共催いただき、横浜都心での木造の可能性を一緒に考え、実践に向かうための基盤を共有できたと感じています。さらには、都市木造の実現に果敢に取り組んでいる先駆的な企業の皆さまにも協賛いただき、これまでの成果の展示やシンポジウムへの参加などを通して、より多角的に都市木造を皆様に紹介できたのではないかと思っています。　（神奈川地域会 代表 飯田善彦）

駅コンコースでのシンポジウムの様子

展　示

公共施設が集中し、2020年完成予定の横浜市新市庁舎の最寄り駅でもある「みなとみらい線・馬車道駅」は、1日3万人を超える乗客が利用しています。この駅のコンコースに、team Timberizeと約30社の協賛企業の模型、パネル、実物サンプルを展示し、日本の木造の歴史、都市木造の実例、技術を紹介しました。

展示から、日本独自の木造文化の歴史を改めて知り、その歴史を途切れさせてはいけないという使命感を感じました。また、すでに都市木造が数多く実在する海外の実例紹介では、私たちが描く優しいまちの風景を見ることができました。東京・青山の表参道を対象とした、どの場所にどんな用途の都市木造を採用すべきか、その建築が群としてどのようなまちの風景をつくるかをスタディーした幅3m近い模型とコラージュ写真は、日本の都市部での都市木造の必要性を可視化し、夢を共有できるものでした。また、木材の無垢、集成材、CLTなどの手に取れる実物サンプルは、来場者の足をとめ、実際に木材のぬくもりを感じてもらうことができました。

展示風景

シンポジウム

シンポジウム1
都市木造の実例紹介

10月27日（金）
18：30～20：30

70名を超える参加者にお集まりいただき、「都市木造の実例」をテーマに、team Timberizeの内海氏と八木氏をはじめ、「下馬の集合住宅」の建主である岩瀬氏、「国分寺フレーバーライフ社本社ビル」の建主である㈱フレーバーライフ社の興津氏と鎌田氏にお話をうかがいました。

耐火木造の難しさ、意外に多様な方法、高コストなど、建築を巡る率直な言説も興味深かったですが、それ以上に、そのような問題山積を承知の上であえて木造を選び実現させた施主の話に盛り上がり、温もりや香りも含め木材の効能、快適さなどリスクを超えた満足感を楽しそうに語る姿に羨ましささえ感じました。施主の理解に寄りかからず他の構法に伍して当たり前のように木造が選択肢になる世界を実現できるか、今後我々も挑戦していきたいテーマであり、そこに向かう決意を促すような内容のあるシンポジウムであったと司会を務めたJIA神奈川代表・飯田氏は振り返りました。

駅コンコースでのシンポジウム

シンポジウム2
都市木造の技術

10月28日（土）
15：00～17：30

「都市木造の技術」にスポットをあて、設計者、施工者、メーカーにそれぞれの立場で都市木造の可能性についてお話しいただきました。まずはメーカーの立場で㈱エヌ・シー・エヌ、㈱キーテック、㈱シェルター、㈱スクリムテックジャパン、㈱ストローグ、㈱竹中工務店、ナイス㈱、銘建工業㈱の計8社に各企業の紹介や都市木造に関係する商品や工法のプレゼンをしてもらいました。これを受け、設計者からはJIA神奈川のメンバーである鈴木氏が中規模な「神奈川大学国際センター」、中村氏から自邸を通して、設計者が選択した工法とその理由などを中心に、司会・田井氏のコーディネートに沿って2時間半の議論を白熱させました。

最終日の交流会

シンポジウム3
横浜における都市木造の可能性

10月29日（日）
15：00～17：00

3日間連続のシンポジウムの最終日、「横浜における都市木造の可能性」というテーマで4人の登壇者に講演していただきました。構造家でありNPO法人Timberize代表の腰原氏は都市木造の“スタンダード化”に対して、メーカーのみならず行政の積極的な取り組みが必要であり、建築家の架構美を捨てるべきではないかと持論を展開、林野庁の永井氏は現在の山林業界が抱える問題を川上、川中、川下と例え、その循環こそが重要である、と指摘しました。横浜市建築局鵜澤氏は今後低層において積極的に木造を推進していくほか、このような気運をぜひ今後につなぎたい、と発言されました。また建築家の杉本氏は外国の事例なども紹介し、林業も製造業も設計者も一体となってこの都市木造を推し進める必要がある、と横の連携を強調されました。2時間半があっという間の充実したシンポジウムであったと、司会進行役のJIA神奈川副代表・柳澤氏は振り返りました。

撤収作業風景

■今後の展開

この建築フォーラムで得た知識とネットワークを生かし、2018年2月23日㈮から25日㈰まで馬車道駅コンコースで行われる「かながわ建築祭」へと繋げます。テーマを“「木」がつくる豊かなまちの風景”に発展させ、メインシンポジウムの基調講演に内藤廣さん、第2回「JIA神奈川デザインアワード」の審査委員長に伊東豊雄さんを迎え、幅広い分野の作品、活動を応募し、より多くの皆様とこのイベントを盛り上げ、「木」がつくる豊かなまちの風景を共有できればと考えています。

埼玉地域会

空間デザインワークショップ「紙の森をつくろう」

開催日：2017年10月7日、8日
会　場：別所沼公園ヒアシンスハウス前

埼玉地域会
代表
村田行庸

埼玉地域会では、市民とのワークショップを毎年行ってきました。その様子を紹介します。

■紙の森をつくろう

昨年秋に開催したイベントは、「紙の森をつくろう」と題して、紙管400本、リピートタイ（何度でも外せる結束バンド）を使って市民の方々に森をつくってもらいました。紙管は壁紙やカーテンなどの芯材を使用しており簡単に入手でき、軽くて丈夫なこともあり、子どもたちだけでも自由に扱うことができます。今回は、開催中はいつでも、だれでも参加できるようにし、2日間で100名以上の子どもたちが自分たちの思いのままに紙管を組み上げていました。中にはお父さんの方が熱中して何時間もかけて大作をつくる家族もいました。さらに小学生未満の子どもたちも楽しめるように、「森にすむ生き物」たちを段ボールでつくるコーナーも用意しました。これはプロダクトデザインを手掛ける地域会協力会員の発案でLEDライトを使い生き物の目を光らせたり、AR技術でスマートフォンと連動させたりして、会員同士のスキルを出し合い、企画をブラッシュアップさせていきました。

開催場所は、さいたま市の別所沼公園内にある、埼玉地域会会員も所属するヒアシンスハウス（立原道造のスケッチをもとに再現した小屋）の会の管理地内。この公園は通行人が多く自然に親子たちが集まってくる場所で、常に人がいっぱいでした。またこのイベントは、「さいたま市文化芸術都市創造補助制度」を利用し、予算約10万円の半分を補助金で賄っています。

■これまでの空間ワークショップ

これまでJIA埼玉では、蓮田白岡環境センター主催によるエコプラザまつりに参加し、さまざまなリサイクル品を使った空間ワークショップを企画・協力してきました。ペットボトルハウス、新聞紙エアドーム、段ボールのまち、古着と紙管のドーム等、7回にわたって開催しました。ここでも子どもたちが集中して生き生きとした姿で作り上げていく様子を目の当たりにし、子どもたちの創意や工夫に驚かされてきました。これらの経験から「ものづくりの楽しさ」を伝えていく活動ができないかと思い続けてまいりました。 そして、昨年さいたまトリエンナーレ2016を機会に、独自に主催・企画をしてアートと建築を融合した空間ワークショップへ発展させていくことができました。

■地域会同士のコラボレーション

10月には中野地域会の呼びかけで、熊谷市内で子ども空間ワークショップを開催することができました。今後このようなイベントから地域会同士の交流が生まれることが期待されます。そしてこの活動を通じて我々が得られたことは、普段のPCでの設計や模型のスタディとは違って、原寸のものを作る難しさを知ったことです。紙管は紙ですので水分を含むとたちまち強度が落ちます。今回、紙管で作り上げた構造体は一晩明けると崩壊していました。夜露に濡れて紙管が曲がってしまったのです。建築の原点を、原寸のものを作ることで身をもって学ぶことができます。普段の設計活動とはまた別の角度で建築を見直すことができるのも、このワークショップならではではないでしょうか。 そして、全国各地域で建築家たちが、このような空間づくりの学びを提供して、すばらしい未来のまちのつくり手が生まれることを願います。

空間デザインワークショップ「紙の森をつくろう」（2017年）

アーティストとの共同作品（2016年のイベントの様子）

杉並地域会

善福寺池周辺の旧井荻村まち歩き

―鳥越けい子氏と善福寺池周辺を巡る―

杉並地域会
代表
林　美樹

■善福寺池周辺の旧井荻村を歩く

杉並区内でも、善福寺池周辺は武蔵野の自然が残り、緑豊かで、古くからお屋敷も多い地域として知られています。今回は、青山学院大学教授で、サウンドスケープの研究者でもある鳥越けい子さんに案内をお願いしました。一般の参加が多く、申込時点で40名を超える事態となり、急遽ハンドスピーカーを準備しての開催となりました。当日は、お天気にも恵まれ、歴史的背景、地形、植生などお話をうかがいながら2時間近く歩きました。

この地域は、町村制が施行された明治22年から東京市に統合される昭和7年まで井荻村（ただし大正15年以降は井荻町）と呼ばれていました。村域は、東西は中央線荻窪駅から西荻窪駅の間、南北は概ね中央線から西武新宿線の範囲となりますが、現在は地名としては残っていません。唯一西武新宿線の駅名「井荻」にのみ痕跡を見つけることができます。井荻村の特徴と言えば、碁盤目状に整備された街区で、畑と雑木林だったこの地域の区画整理事業を行ったのは、明治40年に弱冠30歳の若さで村長になった内田秀五郎です。その他にも中央線西荻窪駅の誘致、井戸水を利用した上水道の整備、西武信用金庫の前身といわれる井荻信用購買組合の設立など、今の時代では考えられないほどの多岐にわたる事業を行ったことで、井荻の偉人と呼ばれています。内田村長は合理的に街区整備を進める半面、武蔵野の豊かな自然を残そうと善福寺池周辺で地元の人たちと風致協会を設立し、その後、善福寺池周辺は風致地区にも指定されました。

私自身も育ちが「井荻」ですので、善福寺公園は子供の頃から親しんでいます。下の池の湿地風景が大好きなのですが、これが人工池であったことを今回初めて知りました。さまざまな歴史的な出来事をたどりながら歩いたことで、随分と見え方が変わったように思います。今あるこの環境は、しっかりとした意識を持って古人が残してくれたものだということ。現在のまち、そして地域が持っている魅力は、一日でつくりあげられたものではありません。それがどこにあるのか、本質は何なのか、何を受け継いで未来につなげるべきなのかをしっかり見極める必要があります。これが今年度の土曜学校のテーマの「成熟するまちと建築～使い続けるために～」のファーストステップに違いありません。

■鳥越けい子さんのお話　@井荻会館

まち歩きの後は、女子大通り沿いにある地区会館で、鳥越けい子さんの講演と懇親会を行いました。この井荻会館は、昭和7年の建築で、当時から公民館的な役割を果たしていたようです。今は町内会などが共同管理し、地域のイベントなどにも活用されているとのこと。昭和の空気が漂う空間で、鳥越さんから善福寺の歴史のおさらいと、サウンドスケープを取り入れたご自宅の改修のお話などをうかがい、その後交流会を楽しみました。

地元をこよなく愛されている鳥越さんは、地主さんが手放した土地が小さな宅地となり、豊かな緑と生物の環境が壊れつつあることを憂いておられました。今回のまち歩きを終え、内田秀五郎の偉業に改めて驚くと同時に、これからの私たちが見据えるべき未来について論された思いです。

善福寺池　上の池にて

井荻会館での鳥越けい子氏講演の様子

32年後の同じ日に地震・メキシコ市

—1985 ～ 2017—

楠木紀男（あべき）

1985年秋に日本建築学会「1985年メキシコ地震災害調査団」の一員として参加し、2年後、メキシコ・アメリカ・日本の合同ワークショップに日本からの4人の参加者の1人として、調査結果の概要を紹介した。さらに1988年度に1年間、国立メキシコ自治大学（UNAMと略称）工学研究所の客員研究員として滞在し、その後も1999年テウアカン地震後の調査など、交流が続いている。

1. 地震国・メキシコ

メキシコは、日本同様に地震多発国である。2017年9月19日、メキシコ市では、1985年の地震によるおよそ1万人の犠牲者を悼み、防災訓練などをしていたところに、地震発生警報が鳴り響き、人々が建物から飛び出したようである。その直後、いくつもの建物が一瞬に崩壊する様子の動画がインターネット上にたくさんアップされた。

地震後、友人たちの安否確認をし、インターネット等でメキシコの被害情報を集めた。

〈1985年9月19日のメキシコ地震（M8.1）〉

1千万人都市を襲った地震による被害の報道は、衝撃的であった。高層建物の倒壊、多くの中層建物の“パンケーキ状”の崩壊は想像を絶するものであった。加えて、マグニチュード8.1の巨大地震とはいえ、震源は、特に大きな被害を受けたメキシコ市から350kmも離れた、太平洋側のミチョアカン州沖の遠距離地震だったのである。

1985年の地震によるメキシコシティーの震災は、多くの解明すべき課題を突き付けた。地震直後、UNAMは、市内5地点ほどの地震観測記録を公開し、研究の推進に大きく貢献した。メキシコ市内は、3タイプの地盤からなる。火山岩地域、旧湖の軟弱地盤地域、それらに挟まれた中間地域であるが、その3地域に地震波が記録されていたことは貴重であった。

調査団のメンバーとして、私のグループはメキシコ市内11か所で、1か所20人以上に面接でアンケート調査をした。推定した震度分布を図1に示した[1]。東側の地域が旧湖地域で、気象庁震度階・震度5～6⁻、西側は火山岩地域で震度4、その中間地域が震度4⁺と推定された。

図1　1985年メキシコ地震時震度（JMA）分布[1]

被害は旧湖地域に集中し、多くは中高層建物で、2階建て程度の建物の被害は見られなかった。

〈2017年9月19日のメキシコ地震（M7.1）〉

今回の地震は、マグニチュード7.1で、メキシコ市から北東120kmのモレロス州に震源が位置する内陸地震である。インターネット上には、振動台で実大建物を崩壊させる実験を思わせるような動画が多くアップされた（ただ、衝撃的ではあるが、1995年阪神淡路地震時に崩壊した建物や高速道路が動画記録されていたら、同じ衝撃を受けたであろう）。

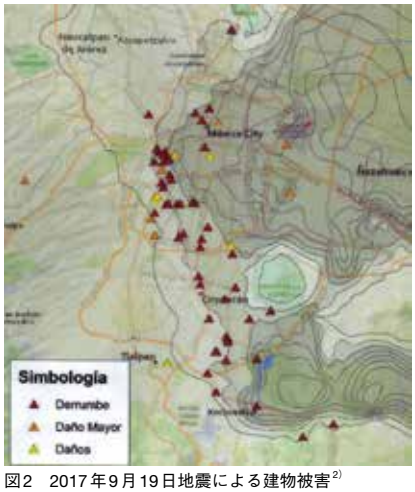


図2　2017年9月19日地震による建物被害[2]

1985年の地震被害がシティーの中心部の旧湖地域に集中し、高層の建物被害であったのに比べ、入手範囲での2017年9月19日の被害は次の特徴がある。

1) 図2から倒壊や大破の建物が中間地盤地域に沿うように南北の帯状に広がっており、旧湖地域には軽い被害がいくつか散在する程度であるように思われること。
2) インターネットに投稿されている被害写真から中層の建物被害が多いように思われること。

1)、2)については、地震動の記録波形や被害場所、建物の特性などのデータが必要となるが、1985年と2017年の被害比較は耐震工学的には興味深いテーマである。メキシコのSMIGの資料[3]に地震波の特性が示されており、1985年と2017年の地震波には周期特性にかなりの違いがみられ1)、2)の傾向を説明できそうである。

2. 被災建物の補修・補強

1985年の地震での被害建物の被災度判定、補修可能な建物の補強については、日本政府が派遣した技術者集団が協力している。

補修・補強された2つの例を挙げておきたい。

〈トラテロルコ団地の高層共同住宅の補修補強〉

約7万人ほどが居住する4層、5層、8層、14層と21層の住宅棟が102棟混在する団地である。4層、5層の中層建物の被害はほとんどなく、14層と21層の被害が多く、14層の1棟は崩壊した[1]。その後、多くの塔状と長方形の高層住宅が写真1のように壁の耐震壁化、またはメガフレームの増設で補強された。

旧湖の超軟弱地盤上で、巨大な耐震壁やフレームを増設した建物の基礎には、外部に空洞の地下室を設けていた。すなわち、水面に浮かぶいかだのように、幅を広げて揺れによる転倒を防ぐという方法である。

入手した、2017年9月21日の地震の被害分布図にはこの団地での被害は見られない。

写真1
1985年の被害。高層共同住宅トラテロルコ団地。耐震壁とメガフレームによる補修補強（1987年撮影）

〈壁画を含む補修補強―通信運輸省(SCT)庁舎〉

メキシコには、壁画の文化がある。“壁画”は革命初期の1910年代に芽生えた文化運動で、その伝統は今も色濃く生きている。壮大なスケールの壁画の典型は、オゴルマンによる、4面が壁画のUNAMの図書館である。

さらに規模の大きな建物の壁画が通信運輸省(SCT)の庁舎で、1985年の地震で大きな被害を受けた。補強・修復に相当の歳月をかけている。

筆者は、その修復段階を継続して現地確認してきた。補修・補強が構造体ばかりでなく、壁画も修復していることに感銘を受け、何度も訪れた。

写真2
補強工事中の通信運輸省（1988年撮影）

写真3
通信運輸省（2012年撮影）

写真4
通信運輸省（2012年撮影）

最後に2012年に訪れ、長い時間、敷地のまわりを歩き回ったあと、バスに乗った。車内で、先住民族らしい母親が6歳くらいの男の子をゆすりながら、壁画を指さして「ほらほら、ご覧、きれいだよ！」と言っているように思えたが、2人で食い入るように見ていた。

「芸術は民衆のもの」が、壁画運動の理念だったと思うが、まさにこの母子の姿こそ、メキシコの画家たちの理想だったであろうと思った。

終わりに

M8.1の遠距離巨大地震（1985年）とM7.1の内陸大地震（2017年）であり震源距離は違うものの、犠牲者数が約1万人と331名である。マグニチュードが1違うと地震解放エネルギーは30倍違うという関係とのあまりの整合に驚かされる。ネット上でSCTの庁舎が昨年の地震に起因して取り壊しが話題になっているが、壁画保存、建物の寿命との関係など気になるところである。

出典：

1）日本建築学会「1985年メキシコ地震災害調査報告書」

2）REPORTE PRELINMINAR iingen.unam
http://www.iingen.unam.mx/es-mx/Investigacion/Proyectos/Paginas/Sismo19sept2017.aspx

3）SMIG: Efectos de Sitio en la Cd. de México durante el Sismo del 19 de septiembre de 2017

なかだえり氏に聞く

その場所で体感したことを イラストにして伝える

今回登場いただくのは、建築学科出身のイラストレーターなかだえりさん。東京・足立区千住のアトリエを拠点に、本や新聞、雑誌などのイラストや執筆活動など多方面で活躍されています。古いものが好きだというなかださん、蔵など古い建物を自身でリノベーションしてアトリエとして使用していたことでも知られています。小さな路地に建つ、元スナックをリノベーションしたアトリエでお話をうかがいました。

――建築学科ご出身ですが、イラストレーターになったきっかけを教えていただけますか。

大学生の時は建築家を目指していて、よく現代建築巡りをしていました。その時にまち並みや古いものに興味を持つようになり、日本大学を卒業後、大学院から都市史が専門の法政大学の陣内秀信先生の研究室に入りました。

陣内研究室ではタイのバンコクの調査に参加しました。その時にまち並みをスケッチしていたら、先生がそれを目に留めてくださって。先生はちょうどイタリアの街をテーマに一般向けのエッセイ本を書き下ろしているところで、さし絵を描く人を探していました。その本のさし絵を在学中に描いて、表紙にも採用され、それが初めての仕事になりました。

――では大学卒業後すぐにイラストレーターになったのですね。

2000年の3月に大学を卒業し、4月にその本が出版されました。当時わたしは千住の蔵をリノベーションして住んでいたのですが、建物をまちに開いて活用したいと思っていた時期だったので、本が出版されたのを機に蔵でイラストの原画展を開きました。その原画展が好評で、若い女の子が蔵をリノベーションしてアトリエにしていることも珍しがられ、取材などがたくさんあり、次第にイラストの仕事が増えていきました。

それでも最初はイラストレーターとしてやっていけるかわかりませんし、まだ建築への未練もありました。作品も大きく、人の生活にも大きく関わる建築と、もう少しささやかですが日常生活に潤いを与えるイラストでは差があるので、ふたつを両立させたいと思っていましたが、結局一度も就職せずにイラストの仕事をしています。

在学中に描いた装画

旧蔵アトリエ

――小さい頃から絵を描くのがお好きでしたか。

はい、昔からよく絵を描いていました。その頃も今も描くのは早いですし、描いていて悩むこともあまりありません。空想のものを描くのではなく、現実のものを描いているからかもしれませんね。

わたしは自分のことをアーティストだとは思っていませんし、建築出身だからか自分本意に何かを発信するという視点がありません。建築には必ずクライアントがいるように、イラストだったら出版社の方やその先の読者のニーズを考えて描いています。わたしはそれに応えることが好きですし、要望に応えて結果を出していきたいと思っています。

――どうして千住を活動の拠点に選んだのですか。

わたしは岩手県一関市出身で、隣の家とはだいぶ距離が離れている環境で育ちました。ですから、密集している東京におもしろさを感じました。大学院時代、自分の研究対象地は東京で、千住はいろいろなまちを見るなかのひとつでした。千住の蔵を調査している時に、築約190年（当時）の蔵が空き家になることがわかったので、はじめはその蔵ありきで大学院在学中の1999年に千住に引っ越し、リノベーションをして住み始めました。イラストレーターになってからはその蔵をアトリエにしていました。

当時はリノベーションというものがほとんど知られて

おらず、地域の方には変わったことをしているなと思われていたでしょう。それがこの18年くらいの間で世の中の流れも変わり、古いものをリノベーションしたりして活用する機運がだんだん上がってきていると思います。スクラップ＆ビルドのような大きなことをする時代ではなくなってきたし、以前からそれはおかしいと思っていました。今は持続性のある街や建物などが増えてきたので、好みの建物が多くなってきました。

残念ながらアトリエにしていた蔵は2013年に家主の代替わりで立ち退きにあい、取り壊されてしまいました。今アトリエにしているこの場所は、築約50年の木造モルタルの元スナックで、カウンターなどを残しながらリノベーションして使っています。

――岩手県ご出身ですが、東日本大震災は何かご自身に影響を与えましたか。

わたしの実家は内陸だったので直接被害はなかったのですが、やはり身近な場所で起こったことですし影響はありました。皆さんと同じように、自分も何か作業を手伝えればと思ったのですが、邪魔になるのもいけないし、自分にできることは何かと考えました。

そしてわたしはイラストレーターなので、津波のことを伝えることができたらと思い、陸前高田の一本松を擬人化した『奇跡の一本松――大津波をのりこえて』という絵本を描きました。擬人化していますが、基本的には取材に基づいたノンフィクションです。陸前高田は岩手県沿岸部の中でも遠浅で穏やかで、小さい時によく家族で出掛けた場所です。自分自身思い入れもありますし、津波のことを伝えていかなくてはいけないと思い、時々読み聞かせもしています。

しかし、震災から6年経ち、復興は進む一方で記憶は風化してしまっているのを感じます。人間が忘れていくのは簡単ですね。この本の話もそうなのですが、大昔から何度も津波が来ていて、そのたびに高台に住めと言われてきたのに、やはり便利な平で低い場所に住んでしまう。今回の大震災で津波には抗えないことに気づかされたはずです。防波堤などをつくって自然に抗うのではなく、共存するために場所を考えて暮らす方がいいと思っています。絵本は被災された方には辛い内容かもしれませんが、全国の人に防災の意識をもってもらいたいと思って描きました。

――よくまち歩きをされているそうですね。

大学時代の延長で今もまち歩きはよくします。実は大学院の時の研究テーマが遊廓でした。当時は四谷荒木町

元スナックをリノベーションしたアトリエ「奈可多"楼」

という昔花柳界だった場所の近くに住んでいて、そこを歩いてみたらなぜかゾワッとしました。教会や寺社など名のある建築ではなく、それが遊廓や花柳界など学問になっていないものでも何かを感じて、心揺さぶられました。それがきっかけで遊廓の研究を始めました。

遊廓巡りは今でもしていますし、趣味として建築を見るのは好きです。博物館や美術館へ行くよりも、人の生活が息づいているまちや場面に魅力を感じます。

――最後に、改めてイラストの魅力を教えてください。

わたしにとって、イラストは伝えたいことを伝えるツール、自分が感動したいいものを伝えるツールです。みんなその日あった楽しかったことを家族や友人に話しますよね。その表現と同じだと思っています。

写真も同じツールのひとつなのかもしれませんが、写真は写ってほしくないものが写り込んだりすることがありますよね。その点、イラストは自分の伝えたいことを強調して描くことができます。それから、水彩画教室をやっていて、生徒さんとスケッチに行ったりもしますが、今まで通り過ぎていたまち並みも、絵を描こうとすることでおもしろいものがたくさん見えてきて、まちが深く見えてきます。それもイラストの魅力だと思っています。

でもまずはとにかく感じることですね。現地の人と話したり、食べることも含めて、絵を描くことだけに固執はしていません。わたしは何事も体感することが大事だと思っているので、これからもいろいろなまちを歩き、場所場所の空気を感じ取っていきたいと思っています。

――貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2017年10月18日　アトリエ「奈可多"楼」
聞き手：中山 薫・有泉絵美（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

なかだ えり

イラストレーター

1974年、岩手県一関市生まれ
1997年、日本大学生産工学部建築工学科卒業
2000年、法政大学大学院建築学科修士課程修了
東京・千住のスナックをリノベーションしたアトリエを拠点に、イラストやエッセイなど執筆。著書に『駅弁女子　日本全国旅して食べて』（淡交社）、『大人女子よくばり週末旅手帖』（エクスナレッジ）、『奇跡の一本松　大津波をのりこえて』（汐文社）は教科書にも採用。水彩画教室開催。http://www.nakadaeri.com

FORUM

東京都美術館

設計：前川國男

東京都台東区　1975年竣工

前号から始まった「バックヤードツアー」では、普段見ることのできない、建物や物事の裏側、裏方を探っていきます。実際に建物を見学し、見慣れている表側の顔とは違った面を、みなさんにも少しだけ味わっていただけるようにレポートしていきます。第2回目は、東京・上野公園内にある「東京都美術館」のバックヤードをご紹介します。（『Bulletin』編集WG）

「東京都美術館」は、1926（大正15）年に日本初の公立美術館「東京府美術館」として開館しました。建物の設計者は岡田信一郎。当時は美術団体等の公募展会場として、その役割を果たしてきました。その後、1943（昭和18）年の都制施行に伴い、名称が「東京都美術館」に変わりました。

1975（昭和50）年、旧美術館が老朽化したため、前川國男設計の新館（現在の建物）が建設されました。敷地面積は約12,000㎡、地下3階地上2階で、上野の公園の中に溶け込むように建物の約60％を地下に埋め込んでいます。印象的なレンガ色の外壁は、焼きレンガ色の打込みタイル工法という技法を使っており、コンクリートの壁と一体化していて前川國男建築の特徴の一つです。この新館の完成を機に、従来からの公募展会場としての役割に加え、企画展や作品収集にも力を注ぎ、美術館として本格的に動き出しました。現在では、国内外の名品による特別展や多彩な企画展、美術団体等による公募展などが開催されています。

美術館という建物の特性上、防犯および守秘の関係でバックヤードを見せていただけることは通常あり得ないのですが、今回は特別に公募展のバックヤードを見せていただくことができました。年間約270もの展覧会が行われる、公募展示空間の裏側をレポートします。

■東京都美術館では、アート・コミュニケータによる「建築ツアー」を定期的に開催しています。詳しくは東京都美術館HPをご覧ください。

搬入から展示までスムーズに流れる仕組み

正門から中に入ると、地上2階建に抑えたボリューム感が、上野公園の広がる緑を背景にとても美しい建物です。向かって右に企画棟、左に公募棟が4棟雁行して配置され、訪れた人を入口から奥へと自然に誘導します。地上レベルから地下1階ロビー階へ下り、美術館の正面入口から建物内に入りました。

公募展示室※1は、第1から第4まで4室あり、地下1階から2階の3層で構成され、計12室あります。美術団体によって展示に使用する部屋の数は異なりますが、年間約270ほどの公募展が行われているそうです。公募団体展の作品搬入は、性質上、作家が自分で作品を持ち込むこともよくあります。裏の搬入口から地下3階にある公募団体展の作業空間に運ばれます。

地下3階のスペースは、単なる搬入準備の空間ではなく、団体ごとに受付をして、持ち込まれた作品の中から実際展示するものを決める審査も行います。

審査は、実際の展示スペースと同じ天井高、同じ仕上げの部屋で行われ、この部屋で展示のシミュレーションも行われたりするそうです。

この部屋の壁には有孔ボードが用いられ、ボードの穴を用いて絵画を吊るすフックを掛けたりするのですが、驚くことにこの穴を皆さん上手に用いていただくことで、入れ替わりの激しい展示構成の中、壁自体のメンテナンスがほとんど行われずに現状が保たれているということを聞き、単純ながらよくできた仕組みだと思いました。

正門から建物エントランスに向かう。左の建物が公募棟。

そうやって選りすぐられた作品がエレベーターで上階に運ばれ展示され、また地下階では次の展覧会の準備が始まるというように、絶えずスペースが使われ無駄なく活用されている様がよくわかりました。

公募団体展を行う美術館として、展示準備から本番まで本当に素晴らしい流れによって支えられていることがわかりました。威圧感が少なく、落ち着いていてかつ格のある外観も含めて、デザインも機能面もトータルで美しくまとまった美術館であることを体感することができました。（長澤　徹）

※1：公募展示室は、一定の条件のもとに貸し出しています。個人での申込みはできません。

公募展示のバックヤード

公募展示作業室・審査室

搬入口
1 階の搬入口から、エレベーターで地下３階へ作品を運びます。

公募棟外観
赤、緑、黄、青に塗られた壁が色鮮やかな公募棟。この地下３階に公募展示の作業室・審査室があります。

公募展示室の壁は有孔ボードです。フックを掛けたり、水平に展示をする際の目印になったり、有効に使われているそうです。

作業室
持ち込まれた作品は、団体ごと１～４の作業室に並べられます。

作業室の通路
１～４の作業室前の通路。長机を設置して、搬入の受付をしている様子が見られました。

審査室
１～４の作業室にはそれぞれ審査室があります。実際の展示室と同じ設えの空間で審査し、展示作品を決めます。

一般市民の参加・交流を支える空間インフラ

今回、案内してくださった職員の方のおひとりが「交流係」に所属とのことで、まず、美術館に「交流係」というセクションがあることに驚き、興味深く感じました。都美術館の資料によれば、館の役割はまず「人々の交流の場」となることとあり、運営体制にもそれが明確に反映されているのだと納得です。

そもそも、都美術館は市民による数々の公募展の受け皿としてつくられたため、常設展や企画展が主体の一般的な美術館とは異なる点が多いとのこと。その特徴は当然空間構成にも表れていて、今回拝見したバックヤードにおいてそれは最も顕著だったように思います。

荷受広間、作業室、倉庫に加えて、実際の展示室の壁仕上げや天井高、照明等を正確に再現した審査室を備えた館のバックヤードは、一般の来館者が訪れる展示室が表側とすれば、裏側と言えます。しかし、そこは専門スタッフやプロの美術品設置業者のためだけの空間ではなく、一般市民である公募展の参加者も日常的に使う場であるという意味において、単なる裏側にとどまらない中間的な領域だと感じました。

たとえば、誘導サインも、利用者にわかりやすいような大きな表示等で工夫されています。また、公募団体スタッフが折りたたみテーブルや椅子を作業室の脇に置き、応募者のための仮設の搬入受付カウンターを設置している様子も見ましたが、その空間の使われ方は想像以上に多様なものでした。

計12室ある公募展示室における展示期間は、基本が約1週間単位ということで、1週ごとに多くの展示が入れ替わります。作業室に控える作品群の物量は、実際に目の当たりにしましたが相当なものでした。そうした物量や速度に注目して見てみると、美術館全体があたかも巨大な物流施設のようです。あるいは、東京ビッグサイトのような展示場に近い雰囲気と言えばよいでしょうか。作家と鑑賞者が明確に分かれておらず、皆で参加する空間。都美術館のバックヤードからは、静謐な美術館というイメージとは異なる、ダイナミックで賑やかな美術館像が喚起されました。

都美術館のバックヤードは、市民の参加や交流を支える空間インフラのひとつのあり方として、大変興味深かったと言えます。プロが作ったものを単に受容するのではなく、自らが「制作」側に回る市民のための「バックヤード」空間。都美術館のバックヤードは古くて新しい場であり、そのツアーは「表」と「裏」の観念の見直しを迫られるような貴重な体験でした。　（会田友朗）

抱負を語る

夢をかたちに

竹下啓子

私の仕事に影響を与えたクライアントがお二人いらっしゃいます。

お一人は、私が意気揚々として自分の建築を作りたいと思いを馳せていた頃に依頼のあった施主です。

当時の家をご自分で建てたという方で、玄関ドアに内装ドアを付けていたりと建築的にはおかしなものでしたが、とても落ち着く家でした。何度も何度もお宅へ伺い雑談しながら、理想の住まい方を導き出し具現化していきました。自分の建築を主張するのではなく施主の住まい方なり生き方に沿った建築をいかに引き出し、施主の期待以上の提案をする。これがその後の私の仕事につながっていきました。

もう一人は、意欲ある若い農家の方です。農業体験のできる環境を作りたいとのご希望でした。120年以上経つ家は、地元の建築士さんは建て替えを勧めたそうですが、私はリフォームをお勧めし意気投合しました。立派な梁や柱を利用し、構造耐力、省エネ性能、自然換気などの性能を上げ、大胆なプラン変更をしました。単なる住宅のリフォームではなく、施主の夢を一緒に作っていった充実感がありました。

建築家という職能は年齢にかかわらず建築に関われる魅力があります。施主と共に理想を形にする、こんな魅力的な仕事につけたことはありがたく、建築家であり続けたいと思います。

傾斜地の家

アグリハウス

抱負を語る

「新人」までの道のり

川添善行

学生の頃から、いろいろな先輩たちに「建築家は40歳で新人」と言われてきました。この1月で39歳になる私は、文字通り「新人」まであと一歩。本稿は、私の「新人」までの道のりについてです。

東京大学の建築学科を卒業し、オランダ留学を経て大学院を修了しました。その後、内藤廣さんに師事するかたちで、東京大学の社会基盤学専攻（＝土木）の景観研究室に参加。その頃、たしか25歳だったと思います。土木の分野には、助教になった32歳まで在籍していました。オランダにいた期間をあわせると、異国であったり異分野であったりと、私の20代は、日本の建築界とは異なる文脈の中にいたことになります。それは、建築とそれを取り巻く環境との関係を知り、建築の可能性と限界を外から見ていた時期だったのかもしれません。

その後、東京大学生産技術研究所に着任し、川添研究室を開設。当時32歳でした。その後は、研究室を拠点にさまざまな活動を展開。先日竣工した、東京大学の新しい図書館や、佐世保にある「変なホテル」などは、この研究室を拠点に携わらせていただいたものです。また、まちづくりや開発研究など、大学に持ち込まれる挑戦的な課題にも取り組ませていただきました。優秀な学生・卒業生たちとの切磋琢磨も続いています。こうしてみると、30代は建築の持つ可能性を実践的に拡張する試みだったのかもしれません。

そしていよいよ「新人」。まずは拠点を、ということで、新しい事務所をつくったのですが、頑張りすぎてしまい、隣に味噌汁屋さんまでつくってしまいました。諸先輩方のお越しをお待ちしております。

事務所外観。正面右側が「麹中」という食の場、左側が事務所の職場。道をはさんだところには、樹齢600年といわれる本郷弓町のクスノキがある。
（写真：木内和美）

「きた住まいるヴィレッジ」

JIA 北海道支部による、行政との協働による地域住宅づくりの取り組み

照井康穂
北海道支部
副支部長

山本亜耕
きた住まいるヴィレッジ検討委員会
委員長

小倉寛征
きた住まいるヴィレッジ検討委員会
委員長

左　：基本設計完了時のイメージパース
右上：模型（武部建設＋アトリエ momo）
右下：敷地模型を利用した定例会の様子

「きた住まいるヴィレッジ」とは

札幌や千歳空港から車で40分の田園都市、南幌町（なんぽろちょう）における新たなライフスタイルを提案するモデルヴィレッジ（住宅展示場）です。特徴としては、①北海道から委託を受けたJIA北海道支部が中心となり企画、コンセプトの作成を行ったこと、②モデルハウス建設事業者は建築家と地域工務店の協働チームであること、③北海道と南幌町、北海道住宅供給公社、6組の事業者、さらにオブザーバーとして北方建築総合研究所、北海道ビルダーズ協会、アドバイザーとして北海道支部が連携を取り、ヴィレッジの実現をサポートしていることなどが挙げられます。

モデルハウスは、半年間の公開後に販売を予定しています。現在（2017年11月）、着工に向けて6組の建築家と工務店が設計を進めています。途中経過を持ち寄った定例会では、コーディネーターの照井副支部長を中心に、模型を並べ、各住戸の計画だけではなく隣接する建物との関係性や外構などの検討も重ねています。

「きた住まいるヴィレッジ」の背景

北海道では近年、大手ハウスメーカー（HM）の進出が続き、地域工務店の存続が危惧されています。積雪寒冷地の技術が広く普及していく中で、HMと地域工務店の差別化が難しくなったことが一因です。これからの地域工務店は、技術だけではなく、北海道独自のデザインやライフスタイルと技術が融合した住まいの提案が求められています。

一方、北海道は2年前から推進している「きた住まいる」[※1]の普及への効果的なPR方法を検討中であり、北海道住宅供給公社は宅地の販売不振を抱え、既存の方法にとらわれない販売戦略を模索していました。また、人口減少や高齢化が進む南幌町でも、効力のある移住定住促進策が求められていました。そのような中、北海道、北海道住宅供給公社、南幌町より北海道支部に「きた住まいるヴィレッジ」への協力要請があり事業が始動しました。JIAに期待されたことは主に、課題を解決する企画力、事業者としての行動力、消費者への訴求力でした。

「きた住まいるヴィレッジ」の概要

そこで、長年、北海道の住宅産業を主導してきた積雪寒冷地の住宅技術に加え、空間や生活の質と快適さを両立できるコンセプトとして、「クオリティーファースト」を提案。「小さく豊かに暮らす・まちの魅力をみんなで育む・長くていねいに暮らす」を具体的方針とし、主な設計ルールを下記のように決めました。

- 敷地を千鳥模様に販売し、空地を有効活用
- テラスや車庫を設置し、外構を一体的にデザイン
- 約100坪の敷地にできるだけコンパクトな住宅
- 季節に応じて内外を柔軟に活用できるプラン
- 基本性能に北方型住宅ECO、長期優良住宅の取得
- 構造や仕上げへの地域材活用、薪ストーブの設置

また、補助金や助成金（子育て世代住宅建築助成金）を活用して事業性の確保を図っています。

現在までの成果と今後の課題

関係者にJIAの理念や能力を理解していただく良い機会となっています。また、地域工務店と建築家の良好な関係が築かれつつあります。一方で事業リスクの管理や、建築家の立ち位置の不明瞭化などの課題も見えてきました。また、事業後も継続的に関われるしくみづくりの必要性を感じています。（小倉寛征）

※1：安全で良質な家づくりの実現を目指して北海道が定めた事業者登録制度。
詳しくは「きた住まいるランド」http://www.kita-smile.jp を参照。

アーバントリップ実行委員会

第83回JIAアーバントリップ

若手建築家による最新教会建築３題を訪ねて

アーバントリップ実行委員会・企画担当
佐藤文人

第83回アーバントリップは、横浜・湘南方面に建てられた最新教会建築3題の見学を、設計された建築家自身による案内で行った。

偶然にも竣工年次は2013～2015年の3年間と同時期、設計者の年代も若手・中堅世代（'69～'75生まれ）の建築家による、構造型式は木造・鉄筋コンクリート造・鉄骨造とそれぞれの建物に合わせた構造形式が採用されている。

■茅ヶ崎シオン・キリスト教会（2013年竣工）

楕円形の外観は聖鳩幼稚園が茅ヶ崎シオン・キリスト教会礼拝堂を囲むように取り巻いた“ストローハット”のような形態となっており、木造のやさしいテクスチャーは園児たちの情操を育むとともに、神聖な円筒型の礼拝堂とのハーモニーも見どころ。
設計：手塚貴晴＋手塚由比／手塚建築研究所
構造・規模：木造、1階建て、延床面積402.71㎡

■湘南キリスト教会（2014年竣工）

湘南の海にほど近い住宅街に建つ教会。新会堂は聖書の天地創造からインスピレーションを受け、屋根は6日間の神の業を表している。礼拝堂は、礼拝の時間には天空光で明るく、午後になると6枚の屋根のスリットから注がれる神の業を感じる直射日光が会堂にさまざまな表情を与え、祈りのために訪れた人を迎える。
設計：保坂猛建築都市設計事務所
構造・規模：鉄筋コンクリート造、1階建て、延床面積175.96㎡

■日本キリスト教団東戸塚教会（2015年竣工）

24枚の屋根プレートを隙間を開けながら組み合わせた雲のような屋根は、崇拝のための場所の原型として「古代イスラエルの幕屋」にインスピレーションを得たとされ、雲のように軽やかで、空との関係を感じさせる軽やかな建築。パイプ本数207本のパイプオルガンの音色にも注目。
設計：平田晃久建築設計事務所
構造・規模：鉄骨造、2階建て、延床面積114.57㎡

今回の教会は全てプロテスタント。厳格な伽藍配置や表現方法等の縛りはほとんどなく、自由な表現が可能となっている。とりわけメインである礼拝堂の採光は、シリンダーからのトップライトや波型ハイサイドライト、襞状サイドライトとさまざまな形態から荘厳な祈りの空間を演出していた。

その建築表現は、異なる構造形式、異なる感性（インスピレーション）、建築空間デザインを開花させた建築家の個性を生かした試みであり、訪れる者にさまざまな感動を与えてくれる密度の高い教会建築を堪能できた。

最後に、茅ヶ崎シオン・キリスト教会では、礼拝堂にて手塚貴晴氏自らがオルガンを演奏するサプライズがあり、たまたま手塚氏に帯同していたMITの学生達とともに、トップライトから差し込む柔らかな光に包まれた空間とのハーモニーに酔いしれることができた。

アーバントリップ実行委員会

第84回JIAアーバントリップ

街並みを継承するかたち 新しい木質建築のかたち

富岡達郎

9月21日、都内では今年最後の真夏日となった天候のなかアーバントリップに参加し、3つの建築を見学しました。

ひとつめの見学先は、茨城県桜川市真壁町にある**「真壁伝承館」**です。真壁町は重要伝統的建造物保存地区に指定され、登録文化財が点在している町です。真壁伝承館は図書館・歴史資料館・集会施設の複合施設ですが、設計者である渡辺真理氏によると、まちの伝統的建造物の形態ボリュームをいくつか抽出し、それらを用いて分棟型の建物を組みあげる手法を採用したそうです。建築の形態ボリュームに歴史や文化の継承価値を見出した結果ということで、重伝建地区に新しい建物を加えることへの真摯な姿勢やユニークな解決法に感銘を受けました。

配置計画では、子供たちの遊び場である建物脇の公園の規模を維持し、地域にとって重要な史跡である神武天皇遥拝所への通路が残され、敷地が持つ歴史的な特性を尊重し未来へ引き継いでいく強い意志を感じました。ボリューム・配置計画では周辺地域に配慮し落ち着いた印象を受ける一方で、構造計画では鉄板パネルを用いることで100mm角の細い柱や、場所によっては100mmの薄い壁で構成し、軽やかさが体感できる刺激的なデザインになっています。中庭にてグラインダーで平滑処理された外壁を見ると、設計者の期待に対し高いレベルで応える職人の仕事ぶりが見受けられました。壁の薄さにより抽象化された開口と合わせ、中庭の夕景を見に改めて訪れようと思いました。

建物の見学後、渡辺氏の案内で敷地周辺のまち歩きをしましたが、「これが伝承館の棟のサンプルではないか」となぞを解くような楽しみがありました。真壁伝承館の向かいの酒屋では地元産の生酒をお土産に購入し、深みのある味に建築同様強い刺激を受けました。お酒が好きな方は真壁にいらした際のおみやげにいかがでしょうか。

次に、つくば市の建築研究所敷地内にある**「つくばCLT実験棟」**を訪れました。大判の木質パネルであるCLTを用いたモデル住宅です。最大長さ6mの大判パネルを活かし、高天井のリビングや2層吹き抜けの廊下、3m跳ね出した2階テラスなど、伸びやかな空間がつくられていました。

設計者の青島啓太氏より、木造建築での大空間の確保やパネルの加工の容易さなどのメリット、衝撃音や反響音、断熱性能や運搬に関するデメリットなどの説明がありました。木質パネルを用いた建築は環境共生の観点で大きな可能性を感じ、音や熱の問題は他の材料を併用することや製品の研究・開発で技術的に解決できると思われます。一方、パネルサイズの大型化に伴い、運搬に苦慮せざるを得ないのが悩ましく感じました。

最後に、つくばみらい市の**「司化成工業つくばテクニカルセンター」**を訪れました。事務所と研究所による、平面が約18m四方の平屋です。外周に研究・会議室等の個室を配し、中心に約10m四方のオフィス空間を設けたニュートラルな平面計画になっています。建物内にて12mm合板を5枚貼り合わせたユニット梁による相持ち構造の天井構造について設計担当の前田道雄氏より説明があり、とても興味深いものでした。内部空間の伸びやかさが印象に残りましたが、ユニット梁の上部がトップライトになっていることや、梁せいが応力の大きさによって変化しリズムが生まれていることが主な要因のようでした。シンプルな構造がもたらす機能美にしばし見入りました。

設計者の解説付きで3つの建物の見学を存分に堪能し、とても充実した1日を過ごせました。最後ではありますが、ご説明いただいた設計者および見学先の方々、企画された実行委員の方々に深く感謝いたします。

真壁伝承館の中庭にて

支部建築家資格制度実務委員会
活動報告

支部建築家資格制度実務委員会委員長
寺山　実

当委員会は「建築家資格制度」の運営のために支部認定評議会ならびに本部建築家資格制度実務委員会の補佐を目的としています。活動は登録建築家の新規申請、更新申請、再登録申請の審査書類および更新要件等を確認した上で、支部認定評議会への審査資料作成になります。

なお、評議会は、議長（JIA会員）そして東京弁護士会、建築士会連合会、日本建築学会および東京消費生活支援センターの各1名の委員、計5名により構成されています。

現在は実績評価認定の登録建築家に主眼がおかれ、2015年・2016年に登録建築家増強キャンペーンを行いましたが、今年度は従来の申請に帰しました。そしてそれに伴いわかりやすい申請方法に改善されています。

一方、国際建築家連合（UIA）の求めるカリキュラムに従った実務訓練認定による「登録建築家」はまだまだ少ないのが現状です。昨年度の実績評価認定による新規登録者数49名、更新者174名、再登録者23名の246名が支部認定評議会を経て本部認定評議会に報告、提出されました。一昨年度の「正会員は登録建築家」という会則変更に伴い、新規登録者・再登録者の申し込みが例年に比べかなり増えていますが、支部正会員1,854名中943名が登録建築家で、概ね半数の会員でしかないことを表しています。

今年度の募集は、新規登録は10月2日、更新・再登録は11月1日から開始しています。より多くの会員が登録建築家に申請するように、広報を心がけていきたいと思います。

交流委員会 Aグループ
今年度の活動報告

交流委員会
法人協力Aグループ幹事
大洋基礎
杉本法司

毎年、Aグループは施設見学会、懇親ゴルフコンペを年2回ずつ開催しているほか、協力会員の会社にて年10回のグループ会議を行っています。本年度は4月と11月にゴルフコンペ、7月に見学会を行いました。

春のゴルフコンペは、平日にもかかわらず、例年並みの参加者に集まっていただきました。河野交流委員長、正会員の皆様にも参加していただき、雨の予報もありましたが、2回のコンペともに降られることなく有意義な交流の場となりました。

7月には、靖国神社～新宿歴史博物館の見学会を開催しました。靖国神社は、明治2年に創建された招魂社が、のちに名前を改められたとのことでした。

本殿は元尾張藩の棟梁・伊藤平左衛門によって釘を使わず建立されました。隣接する遊就館はイタリアの庭師カペレッティーの設計により、明治14年につくられたイタリア城式の赤レンガの建物でしたが大正12年の関東大震災で大破し、現代の建物は伊東忠太教授を顧問に昭和6年に竣工した2代目の建物であることなど、短い時間ではありましたが歴史や建物の造りについて学ぶことができました。

新宿歴史博物館では、江戸時代から現代に至る町の変貌などについてガイドの方から説明を受けました。特に江戸時代の中～後期の新宿の宿場町としての発展ぶり、昭和初期～現在の新宿西口の変貌ぶりには目を見張るものがありました。今回の見学会では、建物見学というよりも歴史を再認識する経験もできました。

新宿歴史博物館にて

交流委員会 Fグループ

施設見学会報告

交流委員会
法人協力Fグループ代表幹事
新晃工業
川辺隆士

我がFグループでは毎年7月に「施設見学会」を開催していますが、今年度は7月26日に東京ガス千住テクノステーション内の東京ガス千住見学サイト「Ei-WALK（イー・ウォーク）」を見学しました。2011年に開設されていますので、すでに多くの皆様も見学されていると思いますが、本施設では最先端のエネルギー技術が紹介されています。

まず、伊東豊雄氏の設計で大胆な総ガラス張りの「コンセプトルーム」でのプレゼンテーションからスタートし、広い敷地内にある実証・実験施設を歩いて見て回りました。特筆に値するのは高温高圧で作動する「加圧型複合発電システム」で、発電能力が250kW級の小型システムを紹介いただいたことです。とても「小型」システムとは思えない新幹線車両ほど巨大な燃料電池（三菱日立パワーシステムズ製）がガスタービン発電との複合発電の実証中でした。また、稼働中の太陽光集熱器・太陽熱発電装置なども実際に手に触れることができました。

最後に家庭におけるエネルギー利用とライフスタイルを提案するコンセプトハウス「暮（Ku）・楽（Ra）・創（Sou）ホーム」を見学。その2階建て住宅内では仕事もプライベートも活き活きと楽しむ暮らし＝まさに近未来の暮らしがすでに実現しており、隔世の感がありました。

見学終了後、上野でもうひとつのメインイベントである「ビアパーティー」を開催し、盛り上がりました。

●参加者　施設見学会　　：12社24名
　　ビアパーティー：18社29名

コンセプトハウス「暮（Ku）・楽（Ra）・創（Sou）ホーム」

城南地域会

活動報告

城南地域会 代表
松本　裕

城南地域会の活動は設立以来10年を越え、2017年度は4月4日の総会、5月13日の1泊2日の合宿にて過去の活動を振り返り、本年度の活動について討議をしました。例年、当地域会慣例の「城南散歩」「アーバントリップ」「城南・ふれあいフォーラム」は、準備、日程等、押し迫った状況になりがちですので、本年度はあらかじめ早めに年間の活動予定日を決めスタートをしました。

「城南散歩」は、6月10日に、江戸町歩き、路地文化等、歴史に造詣の深い岡本哲志氏をコーディネーターに迎え、品川駅から目黒駅までの間を、崖線、台地、谷戸等、変化に富んだ地形と旧大名屋敷跡地等を子細にわたり見学しました。11月14日、同じく岡本哲志氏のコーディネートで旧品川宿を青物市場駅から品川まで歩きました。過去に2回、「城南散歩」で旧品川宿を挙行していますが、今回は歴史、各路地に至るまでの子細な解説を得て、実のある「城南散歩」でした。

「アーバントリップ」は、9月9日～10日にかけて山梨県の建築（宮光園、甘草屋敷、山梨市役所、清春芸術村、山梨県農業大学校、日本盲導犬総合センター）と上条集落等を見学してきました。

なお、特別企画にて10月14日には「啓明学園北泉寮」を見学。旧首相官邸はもともと鍋島公爵邸として洋館、和館（1892年）が建っていて、関東大震災の被災を逃れた和館が現存し、三井家が買取り、現啓明学園の地に移設した建築。

現在、過去の「アーバントリップ」を編集中で、2月発刊予定です。本年度の「城南・ふれあいフォーラム」は、2月10日の開催に向けて企画準備中です。

城南散歩、旧品川宿を歩きました。

城北地域会

まち歩き報告

千川上水をたどる・北区編

城北地域会
秋山信行

「板橋駅・西巣鴨・飛鳥山・石神井川・王子駅へ」のまち歩きに先立ち、まず案内役として飛鳥山周辺の4つの博物館において学習し、当日皆さまへお話しした内容を記述します。まち歩きでは、悠久の歴史に思いを馳せ、縄文から続く人々の暮らしが成り立つダイナミックな地学・地理そして近代までの歴史について語り合うことができました。

千川上水：城北の四区　石神井川と旧谷端川に挟まれた尾根筋。武蔵野本郷台地は人々の暮らしが上水路でつながっていました。練馬・板橋・北区は区庁舎が千川上水の辺に位置し豊島区には千川という地名があります。将軍綱吉の時代に玉川上水を保谷で分岐し開削されました。西巣鴨掘割から江戸・明治期には上水道を中山道に沿い木樋水道で六義園・小石川・上野・浅草までつながっていました。上水としての役割は江戸期にいったん終え、農業用水・水車動力用として利用されました。しかし、幕末期に反射炉大砲製造錐台水車動力源として巣鴨掘割から王子分水を開削延長し、滝野川村への工場用水となります。

用水：インフラとしての役割　上水道・上野博覧会場への水をはじめ工業水路として明治期での大規模抄紙工場（王子製紙）や大蔵省印刷局でお札証紙・透幣印刷用の工場用水として昭和まで経済活動の底力として大いに役立つのです。（お札と切手・紙の博物館、渋沢史料館）

景勝地：飛鳥山・音無川　赤羽・王子・田端・上野へ続く段丘は海食崖でした。六千年前・縄文時代に有楽町海進で石神井川は根津・不忍池方向への流れが飛鳥山段丘を破って海にそそぐわけです。東京湾の海水面は現在より8mも高く、埼玉県まで東京湾は拡がっていました。比較的温暖な縄文は中里貝塚などが4.5mもの深さに堆積し、日本最大規模1kmの貝塚と暮らしがあったわけです。地形から納得です。1万年～2500年前までの縄文時代はハマグリ・カキ・ヤマトシジミなど採って食品加工・交易・暮らしがあり、はるか海の先、筑波山を眺め、武蔵野台地の暮らしが奈良時代豊島郡衙まで続くのです。縄文中期以降、石神井川は「渓谷を刻み」、歌川広重の浮世絵・不動の瀧（正受院）や王子音無川大堰なども行楽の景勝地として描かれました。（北区飛鳥山博物館）

港地域会

MASセミナー2017

港地域会 代表
村上晶子

港地域会では年に3～4回、一般の方々に開かれたMASセミナーを行っています。これは主題に対して地域会建築家がショートプレゼンを行い、会場の方とディスカッションする会です。後半のワイン片手の交流のひとときも含めて、建築をめぐる都市環境を考える機会としています。2017年は新メンバーも加わり3回のセミナーを行いましたので一部をご紹介します。

■第24回「都心に住まう〇と×」（4月8日㈯）

厳しい状況でも、建築家の職能やクライアントとの協働により、良い生活環境が創られることを示せたのではと思います。どこに住むべきか、都心に回帰し集まって住むことを問い直し、良い生活環境を考え提案する必要を深く考え、また考えさせられました。

■第25回「クリエイティブ［アーツ］コア「隠された領域を拓く」」（7月1日㈯）

明治維新から150年を経て、ある意味での安定を得た現在にこそ見えてきたさまざまな「見えている問題」、でも「見えにくい問題」。日本人の創造性に関わる体質と、その織りなす限界等について、地域会会員の大倉富美雄氏の本を下敷きに行いました。難解なお題でしたが、意外に多くの参加者を得て活発な意見交換が行われました。

■第26回「あの人を案内したい港区」（11月18日㈯）

日本の観光地潜在力は外国人6000万人といわれていますが、知られている観光名所だけでは吸引力に限界があります。この回では建築家の視点で、港区に交流人口を増やす魅力的なスポットを紹介し、個性的なバーチャル街歩きを一緒に楽しみました。

MAS セミナー会場風景

目黒地域会

2017年 活動報告

目黒地域会 代表
木村丈夫

恒例の「街かどトーク」など、2017年の活動を紹介します。

①第7回「街かどトーク」

「百年かかって育てた木は百年使えるモノに」と題し6月に開催。講師は2017年から法人協力会員として目黒地域会に参加されるオークビレッジの上野英二さんにお願いした。「永く使い続けられるモノ造りによって、サステイナブルな社会と木の文化の再構築を目指す」を熱く語られた。仕口の原寸サンプルや各種木材サンプルを前に一般参加の方たちにも解りやすいトークとなった。

②第8回「街かどトーク」

10月に東工大蔵前ホールにて開催。「自然に優しい暮らし方」と題し、講師は東工大教授の安田幸一さんと日本で活躍されているドイツ出身の彦根アンドレアさんにお願いした。安田さんは、縄文人の住まいも近世の民家も自然の力を巧みに使っており、ご自身の設計にもこの基本原理は生かされていると説明された。林昌二、雅子ご夫妻が住まわれていた「私たちの家」を引き継ぎ、オリジナル空間を尊重したご自身の暮らしぶりもうかがえた。彦根さんは、水や風の力を巧く生活に生かす故郷での原体験や、親自然的な設計手法を説明された。最後は日本、ドイツ、アメリカの環境やライフスタイル、クライアントの違いなどについての対談で幕となった。

③防災協定

建築士会目黒支部、建築士事務所協会目黒支部、目黒区住宅リフォーム協会、JIA目黒地域会の4団体は、「建築関係の専門家による防災対策、復興対策の支援に関する協定」を区と締結しており、今年度は2回の懇談会が開催された。区からは、防災対策の進捗状況、空き家の実態調査状況等の説明があり、意見交換が行われた。

④目黒区景観アドバイザー

区が指定する特別地域に計画される一定規模以上の建築物に対し、事前協議の段階で都市計画、建築、造園の領域から3名の専門家が選ばれ、より良き街づくりを目指して、事業者や設計者にデザインアドバイスをしている。JIA目黒からは、昨年より棚橋廣夫会員がこの任に就かれ、景観アドバイスの効果も徐々に生まれてきている。

新宿地域会

建築マップ「新宿建築100景」

新宿地域会 代表
小倉　浩

今年度初め新宿地域会の活動方針の一つとして挙げた、建築マップ制作の経過を下記のとおり報告します。

かねてより作成中の、新宿区内の主要建築物および景観のマップ「新宿建築100景」は、2017年度総会での配布を目指して完成した。地域連携会議における各地域会への配布を皮切りに、区内の写真掲載承諾元をはじめ、新宿区文化観光産業部、都市計画部へ説明とともに配布し、出先施設（図書館他40施設あり）への配置依頼をした。JIA建築家大会2017四国での全国地域会長会議においては、全国から参加の地域会代表に配布した。

反応としては期待以上の好評を得たと考えている。その間各位より寄せられた意見からの反省点・改善点は、①説明文の文字が小さく、シニアには読み取るのが辛いとの意見あり、A1判1枚裏表というハンディさにこだわるなら、50景程度に絞り込むことも検討の必要あり。②配布は無料ではなく、公益サービスとしても妥当な200～500円くらいの有料でもよいのではないかとの意見あり。③掲載協力者への配布に際しては、思いのほか関心を示していただき配布予定以上の部数の追加を依頼されたところも少なからずあった。④収録件数、レイアウトの関係から写真が小さすぎた感がある。⑤広告スペースを設け区内主要企業、掲載企業からの広告収入を見込むことも財源不足の折から検討の余地ありと感じた。

新宿地域会で作成した建築・景観マップ「新宿建築 100 景」

FORUM

東京三会建築会議

待機児童問題解消WGの活動報告

東京三会建築会議
待機児童 WG 主査
上垣内伸一

2017年4月20日、内閣府の第16回東京圏国家戦略特別区域会議にて、小池都知事から待機児童対策として建築基準法の採光規定の規制緩和についての提案[※1]がなされた。

その後10月23日、国土交通省から当該規定の一部を改正する告示案のパブリックコメント[※2]が公示された。告示の公示・施行は、12月から年明けの1月頃となる見通しである(2017年12月1日現在)。

この過程において、東京三会建築会議待機児童問題解消WGチームは東京都に対し、建築設計の実務者として保育の実情を踏まえた政策提言を行ってきた。行政と実務者団体の意見交換を経て今回の規制緩和につながったことは、両者が、都市政策について協働で検討、改善を目指す方法として今後も期待できるものである。

待機児童問題解消WGの立ち上げ経緯

待機児童・保育所不足の問題は、2016年初頭の国会で大きく取り上げられ、国民の関心事となった。特に東京都区部では深刻度は未だに突出していると言えよう。当該問題の主な原因は保育士不足と言えるが、一方で建築の法制度にも保育所増設を阻む要因がいくつもあることは、保育所の設計実務に携わる者であれば少なからず思い当たる。そこで東京三会建築会議[※3]の新たな社会的取り組みとして、2016年3月末、待機児童・保育所不足の問題を施設整備面から検討し、建築設計実務者として経験上得られた課題を整理し提言するためのワーキンググループ(WG)が立ち上げられた。

WGでは東京都区部で現実的な選択肢となる、既存建物やテナント区画を保育所に改修するいわゆるストック活用型のケースに着目し、改修型の保育所を多く手がける会員を中心に各会から推薦された4名のメンバーと、各会のオブザーバー3名がアドバイザーとしてサポートする構成となった。

待機児童問題解消WGの活動、規制緩和までの道のり

WGは、ストック活用型の保育所設置に関する条例・法令上の課題を以下のようにまとめて、それぞれ具体的な事例を補足資料として添えて東京都都市整備局市街地建築部建築企画課に意見として説明をした。

1) 建築物バリアフリー条例及び福祉のまちづくり条例関連
  1-1) 建築物バリアフリー条例(高齢者、障害者等が利用しやすい建築物の整備に関する条例)
  1-2) 福祉のまちづくり条例、同施行規則

2) 東京都児童福祉施設の設備及び運営の基準に関する条例関連
  2-1) 東京都児童福祉施設の設備及び運営の基準に関する条例他(認可保育所設置基準)

3) 用途変更に対する既存遡及、法適用の問題
  3-1) 消防法及び東京都火災予防条例
  3-2) 建築基準法
    ①採光規定
    ②その他条例、要綱等〜緑化計画等

当初会合は、実務者団体との意見交換というかたちで、建築企画課が所管する1)のバリアフリー条例に絞って行われたが、回を追うごとにWGの意見内容を重視した相羽芳隆課長の計らいで、都市整備局を越え、保育所の設置等を所管する福祉保健局少子社会対策部保育支援課も加わっての意見交換会に拡大し、2)や3)についても活発な議論が行われた。

その過程で東京都は、建築基準法の採光に関する規定がオフィスから保育所への用途変更を難しくしている側面があることを重要視し、その議論が冒頭の特区会議での提案に繋がった。

また、福祉保健局と直接意見交換ができたことで、2)についても、それまで条文のみで具体的な解説のなかった保育所設置基準が、「東京都保育所設備・運営基準解説」[※4]として2017年6月15日公開に繋がったことも

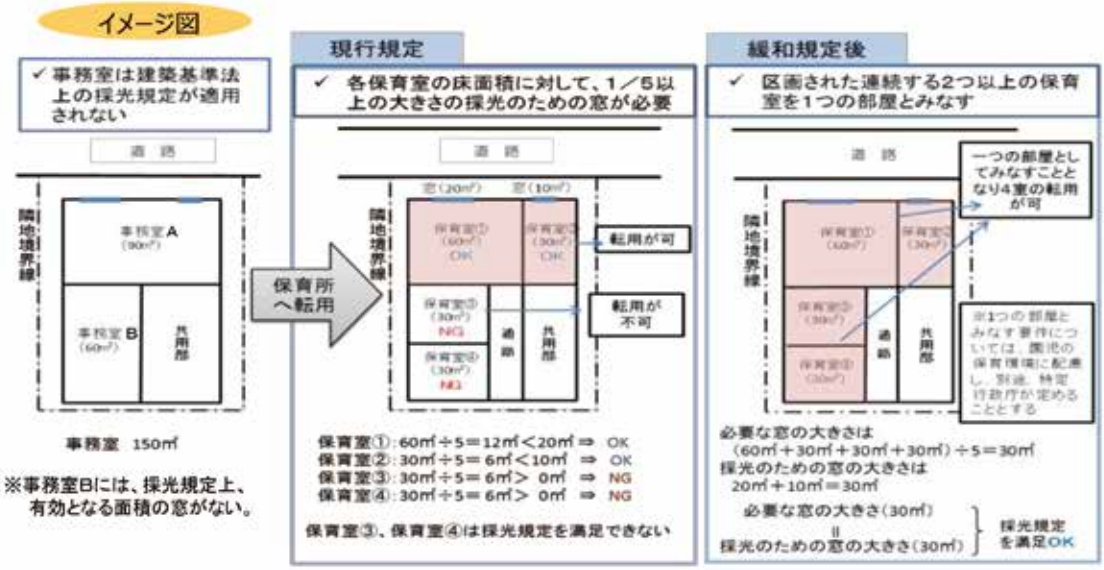


図　内閣府国家戦略特区会議にて提示された東京都の提案（2017 年 4 月 20 日の東京圏第 16 回会議資料 2 から抜粋）

WGの成果である。

待機児童問題は一刻も早い改善が望まれる。その方法として建築設計に携わる専門家が世の中に問えるのは、特殊解として個別に保育所を増やしていく方法や、根本的に保育所を設置しやすく法制度を改良していく方法があろう。後者は制度を変える必要があり時間がかかるが、我々 WGはあえてそちらの道を選択した。それは、都市政策の問題解決には行政と実務者の協働が不可欠であるとの考えからである。

採光規定の緩和は当初WGで提起した課題のひとつに過ぎず、他にも課題は多く残されている。引き続き東京都との意見交換を通じて、円滑な保育所設置に向けて改善できればと考えている。そして同時にこのような改善が、より良い保育環境の実現に繋がるよう実務者団体としても周知徹底を図っていくべきと考える。

三会だからできること

2014年の建築士法改正が、建築三会の力を合わせた働きかけによるものだったということ、そしてその発端が東京三会建築会議であったと知ったことが、別の社会問題についても何かしら解決の役に立つことができるのではないかと考えるきっかけとなり、それが今回のWGの活動に繋がった。それぞれの会単独では力及ばないことも、三会で力を合わせると可能になることもある、ということがまたひとつ実現した。これからも今回のように、職能を通じてより良い社会づくり、まちづくりに役立っていければ本望である。

※1：内閣府国家戦略特区ウェブサイト
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kokusentoc/170420goudoukuikikaigi.html

※2：照明設備の設置、有効な採光方法の確保その他これらに準ずる措置の基準等を定める件及び建築物の開口部で採光に有効な部分の面積の算定方法で別に定めるものを定める件の一部を改正する告示案に関する意見募集について（案件番号155170729）

※3：（一社）東京建築士会、（一社）東京都建築士事務所協会、（公社）日本建築家協会関東甲信越支部が、共通の問題を話し合うための会議体で、2011年のUIA東京大会を機に月例会の形で運営されている。

※4：「東京都保育所設備・運営基準解説」ダウンロードウェブサイト
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kodomo/hoiku/ninka/n_syousai.files/290615setsubiunneikizyunn.pdf

●東京三会建築会議　待機児童問題解消WG

メンバー　：石嶋寿和（石嶋設計室）
上垣内伸一（主査）（ウエガイト建築設計事務所）
江島知義（三菱地所設計）
川﨑修一（副主査）（川﨑建築計画事務所）

オブザーバー：小田圭吾（東京建築士会）
加藤峯男（東京都建築士事務所協会）
室伏次郎（日本建築家協会関東甲信越支部）

協　力　：山本康友（首都大学東京教授、前東京建築士会副会長）

新ホームページいよいよ公開！

このたび、広報委員会で進めてきた、新ホームページが完成し、新春の集い（1月19日）にて公開いたします。

広報委員会では、説明会を11月9日と12月14日の2回にわたり開催し、予想を超えるたくさんの広報担当者に来ていただきました。

制作会社のスタジオネオに説明会を依頼し、その場でネットにつなげ、例題を投稿してデモンストレーションをしました。今まで以上に使いやすいことを伝え、時間いっぱいまで質問が途切れず、皆さんが新ホームページに期待されていることを肌に感じ、広報委員会一同、気が引き締まる思いです。

●皆でつくる……成長するホームページ

新ホームページはこれまで以上に会員参加型ホームページです。各活動の担当者や地域会の広報が積極的に参加し、記事の内容が充実することによって多彩なホームページが軌道に乗り、会員だけではなく、市民のJIAに対する関心も高まります。

●活動の「見える化」

ビジュアルを含めて、興味深く行事を告知するだけではなく、活動報告もUPすることによって、記事が記録として深化します。行事全体を把握しやすく、また、効率的な活動計画の立案にも繋がります。

●交流の結節点

支部各会の活動日程や内容の見える化によって、地域会・委員会・部会等の枠を越えた連携を生まれやすくし、活動の幅を広げます。また、法人協力会員との交流・技術提供についても積極化します。

皆さん、新ホームページをぜひ活用してください。

（支部広報HPWG主査：中澤克秀）

第１回説明会

第２回説明会

告 知

JIA建築家大会2018東京

2018. 9.14（金）—15（土）

今年9月に開催される「JIA建築家大会2018東京」、大会実行委員会からのお知らせです。

●大会テーマ決定

素なることと多様な相

Simplicity｜Multiplicity

●大会スケジュール

「JIA建築家大会2018東京」の開催は、9月14日㈮・15日㈯の2日間ですが、同じ週に行われるACA18 Tokyo（ARCASIA東京大会2018）と連続で開催を予定しており、13日㈭から関連プログラムが始まります。

本大会とあわせて、13日のACA18 Tokyoにもぜひご参加ください。

13日（木）	ARCASIA東京大会のプログラム
14日（金）	午前：ARCASIA東京大会のプログラム 午後：基調講演・レセプションパーティー　（JIA建築家大会）
15日（土）	全国会議・委員会地域会会議、その他プログラム、さよならパーティー　（JIA建築家大会）

大会ロゴマーク募集

大会のロゴマークを募集します。
応募者は事前に支部事務局へメールにて連絡の上、作品を提出してください。

締切：2018年1月29日（月）必着
提出：作品はメールにて送付。
　件名は「JIA建築家大会2018東京ロゴマーク募集」
著作権の扱い：応募作品の著作権は、JIAに帰属します。

ワーキングメンバー募集

全国大会実行委員会は、運営部会、企画部会、広報部会、財務部会の4部会で構成されています。
このたび、企画部会、広報部会でワーキングメンバーを募集します。
企画部会は各プログラムの立案・調整、広報部会は広報全般が主な活動内容です。大会運営に興味がある方、JIAに関心のある方は積極的にご参加ください。
参加申し込みは随時受け付けています。支部事務局へご連絡ください。

プログラム企画開催の募集（予定）

本大会において開催するフォーラム、会議、展示等の各種イベントの募集を予定しています。申し込みの詳細が決まり次第、募集の告知をいたします。

■大会ロゴ、ワーキングメンバー応募先

JIA関東甲信越支部事務局　浅尾
E-mail：easao@jia.or.jp

仏像の横「百済観音」

私が仏像を真剣に見はじめたのは、30歳の頃で、栗生総合計画事務所時代に平等院宝物館の設計を担当したのがきっかけでした。以来20年間、平安時代の最高の仏師定朝によって制作された平等院阿弥陀如来坐像をはじめとして、数多くの仏像を見続け、今もはまっています。

巷では、仏像の鑑賞や世界観を楽しむ女性（仏女）も多く、仏女は端正な顔立ちの興福寺の阿修羅像を仏像界アイドルと言っているとのことは納得です。

さて、今回は、約20年前にはじめてみた「百済観音」のお話をしたいと思います。「百済観音」は、法隆寺所蔵の国宝で、制作年代や作者、由来は不明です。「百済観音」は呼称で「朝鮮風観音」であることからそのように呼ばれていますが、作風から日本で作られたのではとも言われています。国宝指定名は「木造観世音菩薩立像」で、高さ210cm程度のクスノキの一木造の仏像です。

私が見るきっかけになったのは、1997年から1999年にかけて日仏の友好として「フランスにおける日本年」と「日本におけるフランス年」が企画され、それぞれの国宝を1点ずつ展示することになり、日本からは「百済観音」がフランスのルーブル美術館で展示され、フランスからはウジェーヌ・ドラクロワ作の「民衆を導く自由の女神」が東京国立博物館で展示されました。その時「民衆を導く自由の女神」を見た方は多いでしょう。巷では「民衆を導く自由の女神」の圧倒的な迫力に対して、「百済観音」は地味な感じなので「○○○○○観音」と呼ぶ人がいました。しかし、ヨーロッパでは、絶大なる人気で“日本のビーナス”と賞賛されました。その両論があるためぜひ見たいと思い、帰国展が東京国立博物館で行われたので見に行きました。

やはり、その幽玄さや品格は“日本のビーナス”でした。通常仏像は正面から見るのが一般的ですが、私は「百済観音」は横から見るのがお勧めです。8頭身のモデル並みのスタイルに加え、そのからだはS字に緩やかにカーブしながら天に舞う瞬間のようで美しい。また、左手に持つ水瓶は落ちそうな感じがはかなさを感じつつ優雅です。ぜひ、「百済観音」を横（出来れば左側から）からご覧ください。

仏像豆知識

仏像に手相があるのをご存知ですか？　いくつかタイプはあるのですが、圧倒的に多いのが奈良の大仏など「ますかけ」です。「ますかけ」は強運の持ち主といわれ、歴史上の人物では織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などがそうだったといわれています。手相の「ますかけ」は、片手で100人に5～10人、両手では1,000人に1人という確率でなるとされています。皆さんはどうですか？　仏像と同じ手相だと親近感やご利益がありそうです。仏像を見られる際、注意してみてください。ちなみに筆者は、両手「ますかけ」です。

（鈴木弘樹）

今年の抱負

■一日一日を大切に過ごす　（上原）
■楽しく元気に過ごす！　（有泉）
■仕事のバランスを見直して健康に過ごします。　（長澤）
■全国大会東京、初のアルカジア大会、共に広報として成功を祈ります。　（中澤）
■今年は息子、娘共に受験生…慌ただしい1年になりそうです。　（八田）
■仕事と家庭のベストバランスを模索します。　（会田）

編集後記

■次の一手を実現するための一歩をふみだす。　（中山）
■今年は「先見の明」を持つ。　（吉田）
■仕事　料理　読書　作画　運動をバランス良く　（古谷）
■いろいろなことを楽しむ心の余裕をもつ。　（清水）
■今年は全国大会、アルカジア大会を成功させるため広報一丸となり、応援努力いたしましょう。　（立石）

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：市村宏文
副委員長：長澤　徹
委員　：会田友朗・有泉絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・中山　薫・古谷俊一・吉田　満
編集長　：長澤　徹
副編集長：小山将史
編集ワーキングメンバー：有泉絵美・中山　薫・八田 雅章・立石博巳・会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田　満
編集・制作：南風舎

Bulletin 273　2018 冬号
発行日：平成30年1月15日
発行人：浅尾 悦子
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 協進印刷

■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA）　http://www.jia.or.jp/
・建築家online（一般向け）　http://www.jia-kanto.org/
・JIA関東甲信越支部（会員向け）　http://www.jia-kanto.org/members/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。
© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2018

100年クリーン

水のチカラで、ずっと輝く
AQUA CERAMIC

クリーン① トイレの汚れが、ツルンっと落ちる。※1
クリーン② リング状の黒ずみ、くすみとサヨナラ。※2
クリーン③ 新品時のツルツルが、100年つづく。※3

LIXIL主力住宅トイレのすべてに「アクアセラミック」を展開

※1 付着した汚物よごれによっては、お掃除が必要な場合があります。 ※2 定期的にお掃除しない場合、汚れが付着する場合があります。
※3 同一部位の摩擦回数2往復で年間365日お掃除した場合。お掃除ブラシで約7万回（100年相当）の往復を想定しています。

株式会社 LIXIL　お客さま相談センター　0120-179-400　受付時間：平日 9:00〜18:00　土・日・祝日 9:00〜17:00